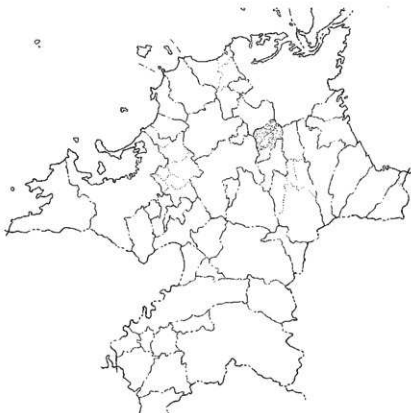


伊方小学校遺跡第4地点

福岡県田川郡福智町所在遺跡の発掘調査報告

福智町文化財調査報告書

第4集



第1図 福智町の位置

2014

福智町教育委員会



伊方小学校遺跡遠景（東上空より）

序

筑豊はその名が示すように、筑前と豊前が接する東西文化の交流地帯であり、筑豊の一角に位置する福智町は、福智山系を仰ぎ、彦山川と中元寺川が合流し貫流する自然あふれる町であります。

また、本町は400年以上の伝統を誇る上野焼に代表される陶芸の里としても知られ、童謡作曲家として有名な河村光陽先生が生まれた町でもあり、文化的にも恵まれた地域であります。

本書では、平成23年度に行った伊方小学校遺跡第4地点の調査について報告させていただきます。この遺跡は弥生時代の集落遺跡であり、周辺では弥生時代から古代にかけての遺跡が多く確認されており、広く遺跡の存在する伊方丘陵にあつて最も遺跡の密度が高いところです。私どもは、この遺跡を保存することによって、末永く後生に継承しなければならないと考えており、この遺跡が「ふるさと」の再発見や「まちおこし」の一助になれば幸いと考えているところです。

遠くにしえ人の生活を偲び、文化財保護、文化財愛護の意識を高め、広く地域の歴史を知る上で、本書がご活用いただければ幸甚に存じます。

なお、今回の発掘調査、報告書の刊行に際し、ご指導・ご協力くださいました方々、並びに関係機関に対して、心より感謝申し上げます。

平成25年3月31日

福智町教育委員会
教育長職務代理人 黒土 孝司

例 言

1. 本書は、福岡県田川郡福智町伊方所在の伊方小学校遺跡第4点における、福智町立伊方小学校屋内運動場改築工事に伴い実施した発掘調査の報告書である。福智町文化財調査報告書の第4集にあたる。
2. 発掘調査及び報告書作成は福智町教育委員会が実施した。
3. 本書に掲載した遺構図は、井上勇也・太田信行・奥村ひろみ・高田由美子・藤川岳久・古岡淳子が作成した。
4. 掲載した遺構写真及び遺物写真は井上が撮影した。遺物実測図及び図面の浄書は井上、奥村、齊藤亮磨、高田、古岡が作成した。空中写真は九州航空株式会社による。
5. 出土遺物の整理・復元、実測・製図作業は福智町教育委員会が主体となり実施した。
6. 本書に使用した方位は全て座標北である。
7. 本書の執筆は井上が行った。編集については齊藤の協力を得て井上が行った。

目 次

I 調査に至る経緯と経過	1
1. 調査に至る経緯と経過	1
2. 調査組織	1
II 位置と環境	2
III 調査の記録	9
1. 調査の方法	9
2. 基本順序	9
3. 住居	9
4. 土坑	10
5. 井戸	27
6. その他の遺構と遺物	31
IV おわりに	35

図版目次

巻頭図版	伊方小学校遺跡遠景（東上空から）
図版 1	1.調査区全景（北西から）、2.SI1 完掘状況（北から）、3.SI2 床面検出状況（南から）
図版 2	1.SI2 完掘状況（南から）、2.SI3 完掘状況（西から）、3.SK1 完掘状況（西から）
図版 3	1.SK2（右）・SK3（左）遺物出土状況（南から）、2.SK2（右）・SK3（左）完掘状況（南から）、3.1.SK4 土層状況（南から）
図版 4	1.SK4 完掘状況（南から）、2.SK5 遺物出土状況（北から）、3.1.SK5 土層状況（北から）
図版 5	1.SK5 完掘状況（東から）、2.SK6 土層状況（南から）、3.SK6 完掘状況（南から）
図版 6	1.SK7 遺物出土状況 1（西から）、2.SK7 遺物出土状況 2（北から）、3.1.SK7 完掘状況（南から）
図版 7	1.SK8 完掘状況（南から）、2.SK9 完掘状況（南から）、3.SK10 遺物出土状況（西から）
図版 8	1.SK10 完掘状況（西から）、2.SK11 土層状況（東から）、3.SK11 完掘状況（南から）
図版 9	1.SK12 上部（南から）、2.SK12 遺物出土状況（南から）、3.SK12 完掘状況（南から）
図版 10	1.SE1 完掘状況（南から）、2.SX1（右）・SX2（左）検出状況（北から）、3.SX2 遺物出土状況（北から）
図版 11	1.SX1 石材検出状況（西から）、2.SX3 完掘状況（東から）、3.伊方小学校児童見学風景
図版 12	出土遺物
図版 13	出土遺物
図版 14	出土遺物
図版 15	出土遺物
図版 16	出土遺物
図版 17	出土遺物
図版 18	出土遺物
図版 19	出土遺物

挿図目次

第 1 図	福智町の位置	
第 2 図	伊方小学校遺跡第 4 地点周辺遺跡分布図（1/25,000）	3
第 3 図	伊方小学校遺跡周辺地形図（1/2,500）	4
第 4 図	伊方小学校遺跡第 4 地点遺構配置図（1/100）	7・8
第 5 図	基本層序（1/40）	9
第 6 図	SI1～SI3 実測図（1/60）	9
第 7 図	SI1・SI3 出土遺物実測図（1/4）	10
第 8 図	SK1～SK 3 実測図（1/40）・SK2・3 遺物出土状況図（1/20）	11
第 9 図	SK1 出土遺物実測図（1/3）	12
第 10 図	SK2・SK3 出土遺物実測図（1/4）	12
第 11 図	SK4 実測図（1/40）	13
第 12 図	SK4 出土遺物実測図実測図（1/4）	14

第 13 図	SK5 実測図 (1/40)・遺物出土状況図 (1/20)	15
第 14 図	SK5 出土遺物実測図 (1/4)	16
第 15 図	SK6 実測図 (1/40)・遺物出土状況図 (1/20)	17
第 16 図	SK7 実測図 (1/40)・遺物出土状況図 (1/20)	18
第 17 図	SK6・SK7 出土遺物実測図実測図 (1/4)	20
第 18 図	SK7 出土遺物実測図実測図 2 (1/4)	21
第 19 図	SK7 出土遺物実測図実測図 3 (1/4)	22
第 20 図	SK8 実測図 (1/40)	22
第 21 図	SK9 実測図 (1/40)・遺物出土状況図 (1/20)	23
第 22 図	SK10 実測図 (1/40)・遺物出土状況図 (1/20)	24
第 23 図	SK8・SK9・SK10 出土遺物実測図 (1/4)	26
第 24 図	SK10 出土遺物実測図 2 (1/4)	27
第 25 図	SK11 実測図 (1/40)	27
第 26 図	SK12 実測図 (1/40)・遺物出土状況図 (1/20)	29
第 27 図	SK11・SK12 出土遺物実測図 (1/4)	29
第 28 図	SK12 出土遺物実測図 2 (1/4)	30
第 29 図	SE1 実測図 (1/40)	30
第 30 図	SE1 出土遺物実測図実測図 (1/3)	30
第 31 図	SX1 実測図・遺物出土状況図 (1/40)	30
第 32 図	SX2 実測図 (1/40)・遺物出土状況図 (1/20)	32
第 33 図	SX2・SX3 出土遺物実測図 (1/4)	32
第 34 図	出土石器 1 (2/3)	33
第 35 図	出土石器 2 (1/2)	34
第 36 図	出土石器 3 (1/2)	35

I 調査にいたる経緯と経過

1. 調査に至る経緯と経過

(1) 調査の経緯と経過

平成 22 年度に行った、次年度の事業照会の中で福智町教育委員会学校教育課より伊方小学校、弁城小学校の屋内運動場改築が計画されていることが確認できた。その中で伊方小学校屋内運動場の建築予定箇所は旧方城町において給食センター改築計画があった場所であり、平成 16 年度に試掘調査を行っていた。試掘調査の結果からは弥生時代の遺構、遺物が確認され本調査が必要であるとの報告を行っていた。その際の試掘調査の結果を基に協議を行い、次年度当初予算での本調査費用の確保を行い改築工事前に本調査を行うこととなった。平成 23 年度本調査、平成 24 年度から 25 年度にかけて整理作業を行い、平成 25 年度末に報告書を刊行した。

2. 調査組織

調査組織

福智町

町長	浦田 弘二	
教育長	嶋野 勝	(平成 24 年 7 月 19 日まで)
教育長職務代理者	黒上 孝司	(平成 24 年 7 月より)
学校教育課		
課長	田村 一人	(平成 24 年度まで)
	黒上 孝司	
主幹	中山 正和	
嘱託	木戸 昭生	

生涯学習課

課長	辻村 哲弥	(平成 24 年度まで)
	森野 和彦	(平成 25 年度から)
主幹	中村 英二	(平成 23 年度から 24 年度)
係長	八代 賢一	(平成 23 年度から 25 年度)
主査(経費執行事務・担当)	長野 士郎	(平成 22 年度から 23 年度)
	井上 勇也	(平成 24 年度から 25 年度)
	仲村 浩美	(平成 25 年度 1 月から)
主任主事(経費執行事務・担当)	井上 勇也	(平成 21 年度から 23 年度)
	仲村 浩美	(平成 23 年度から 25 年度 1 月)
主事(担当)	井上 勇也	(平成 20 年度)
	斉藤 亮磨	(平成 25 年度)

発掘調査、整理作業に参加された方々は下記のとおりである。記して感謝いたします。

発掘作業員・整理作業員（敬称略・五十音順）

石井康文、石本和也、衛藤直実、太田信行、奥村ひろみ、小松五十鈴、紫原香代、高田由美子、寺田勝義、永末信一、奈木野由佳、長谷川清之、原田勝治、藤川岳久、松田哲幸、松浦尚恵、吉岡淳子

調査にあたって、福岡県教育庁総務部文化財保護課においては現地視察、協議に際し有益な御助言・御教示をいただいた。筑豊、北九州両教育事務所管内文化財担当者の皆様には調査、報告書作成において有益な御助言・御教示をいただいた。

現地調査においては地元住民ほか関係各位に多大な御理解と協力を得た。また、多くの方々に調査・報告書作成において、有益な御助言・御教示をいただいた。感謝いたします

Ⅱ 位置と環境

（1）地理的環境

この遺跡の所在する福智町は福岡県の中央部、田川郡の北端に位置し、平成 18 年 3 月 6 日赤池町、金田町、方城町の 3 町が合併し誕生した。北は福智山系を挟んで北九州市、南は田川市、糸田町、東は香春町、西は直方市、飯塚市に隣接する。町の北側は福智山を中心とする山岳地帯であり、起伏に富んだ地形である。南側には福岡県第 2 位の河川として知られる一級河川遠賀川の支流、中元寺川と彦山川が合流し、西へ流れ出る。現在の人口は約 26,000 人、観光、教育をはじめとする人の活力を生かした町作りを展開している。文化的には、400 年の歴史を誇る上野焼に代表される陶芸の里、童謡作曲家の河村光陽生誕の地として全国的に有名である。

伊方小学校第 4 地点は福岡県の中心部を流れる遠賀川の支流のひとつ彦山川の右岸、福智山系から南西へ派生する丘陵の先端、標高 35m 付近に位置する。遠賀川の中流域に含まれる地域であり、周辺では町道の拡幅工事や方城中学校の改築事業等により発掘調査が行われ弥生時代から古代、中世にかけての遺跡が確認されている。

（2）歴史的環境

福智町の歴史的環境であるが、国の登録文化財 1 件、県指定文化財 8 件、町指定文化財が 15 件と指定、登録文化財だけでも 22 件を数え、他にも多くの文化財が所在し地域の歴史に触れる材料が豊富な土地である。

町内でもっとも著名な文化財は登録文化財の九州日立マクセル赤煉瓦記念館や、県指定文化財を 3 件所有する上野興国寺であろう。前者は旧三菱方城炭鉱時代の建物であり築 100 年を越え、内部は社員用の喫茶室、展示場として現在も活用されている。この赤煉瓦の建物は敷地内に残る他の赤煉瓦建物とともに、かつて炭坑で栄えた筑豊の近代化遺産を象徴する存在となっている。上野興国寺は足利尊氏が九州へ逃れた際に隠れたとも伝えられ、尊氏、直義兄弟発願の安国寺の一つである。古文書、仏殿（観音堂）、木造玄明禪師坐像は県指定文化財に指定されている。また、町内には県下でも著名な天然記念物であるエドヒガンの虎尾桜、定禅寺境内の迎接の藤と呼ばれる藤があ

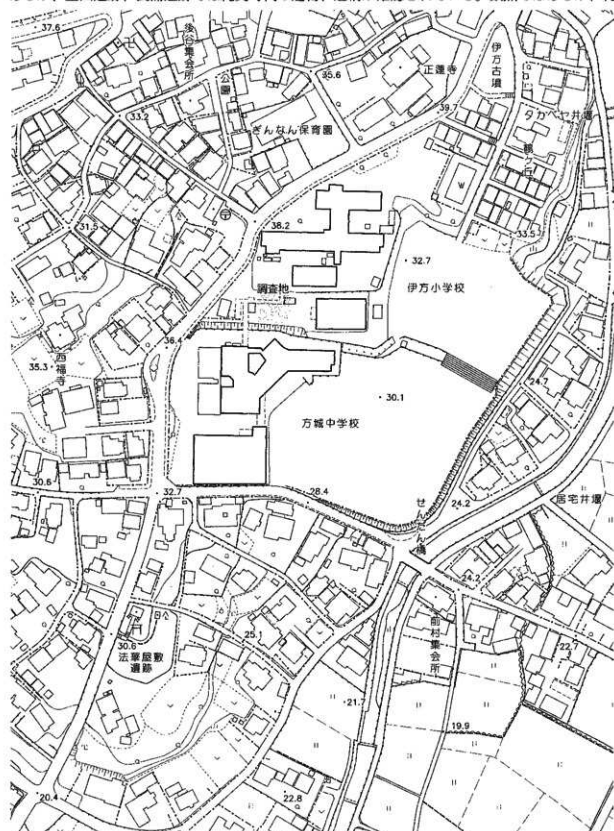


第2図 周辺遺跡分布図 (1/25,000)

1. 伊方小学校遺跡第4地点 2. 伊方小学校遺跡第2地点 3. 伊方城岡遺跡 4. 伊方小学校遺跡第2地点 5. 伊方小学校遺跡第3地点 6. 伊方小学校遺跡第1地点 7. 伊方石丸遺跡 8. 伊方古墳 9. 九州日立マクセル赤煉瓦記念館 10. 前村遺跡 11. 法華聖教遺跡 12. 高崎山古墳 13. 野添遺跡群 14. 長谷横穴墓群 15. 三本松古墳群 16. 草場遺跡 17. 宝珠遺跡 18. 迫遺跡 19. 迫横穴墓群 20. 迫古墳 21. 板取遺跡 22. 宮ノ馬場遺跡 23. 上野興国寺 24. 上野釜の口遺跡 25. 上野重山本宮跡 26. 福泉坊跡 27. 岩原高麗竈跡 28. 方城岩屋磨崖梵字曼荼羅 29. 広谷遺跡 30. 金山遺跡 31. 長瀬遺跡 32. 夏吉古墳群 33. 城山横穴群 34. 東金田横穴 35. 玉徳山古墳

る。虎尾桜は福智山の中腹にあり、そこにいたる道は幾分険しいものの毎年盛りになると多くの見物客が訪れている。このエドヒガンは希少種の桜であるが、町内の福智山山麓には九州でも例がない密集地帯として有名である。

福智町では、古く縄文時代より人々が生活していた痕跡が残されている。明確な集落は未確認であるが、金山遺跡、長浦遺跡では縄文時代の遺物、遺構が確認されている。数点ではあるが、縄文



第3図 伊方小学校遺跡周辺地形図 (1/2,500)

時代早期から前期の縄文土器も出土し、古くからこの地で人々が暮らした痕跡が残されている。特に金山遺跡では縄文時代後期から晩期の石器製作跡と考えられる遺構が確認され、周辺に縄文時代集落が存在した可能性がある。

弥生時代は、遠賀川流域では立岩遺跡や立屋敷遺跡といった学史上に残る遺跡も多く確認されている。立岩遺跡では10面の前漢鏡が出土した集団墓が確認され、弥生時代のクニの存在が明らかとなっている。また、そこで生産された石包丁は北部九州に広く分布し、生産地としても立岩遺跡は全国的に有名である。彦山川流域では北部九州の弥生時代研究の資料として知られる下伊田式土器の由来となった下伊田遺跡などが存在する。町内では彦山川、中元寺川の河岸段丘に生活の場が移り、伊方丘陵やその周辺、神崎などで生活の痕跡や墓地在確認されている。伊方丘陵では、今回報告する伊方小学校遺跡第4地点周辺を含め、先に調査された伊方小学校遺跡第1から第3地点、法華屋敷遺跡、伊方石丸遺跡等の弥生時代の遺跡が確認されている。伊方小学校遺跡、法華屋敷遺跡では住居、貯蔵穴等の集落遺構が伊方石丸遺跡では弥生時代の墓地在検出されている。伊方丘陵やその周辺は弥生時代から古墳時代にかけて主要な生活の場であったと考えられ、町内でも有数の遺跡密集地帯である。弥生時代後期末から弥生時代終末と考えられる宝珠遺跡の石棺墓から内行花文鏡が出土し、ほぼ同時期と推定される三本松古墳群からも同じく内行花文鏡が出土している。このことは、有力者の存在を連想させ、後の伊方古墳と並び周辺地域の中でも中心地であったことがうかがわれる。青銅器は弥生時代においては有力者層の存在を想定できる資料である。彦山川流域では上流域の大任町で銅剣が、隣の糸田町では銅戈が、香春町では宮原遺跡で銅鏡が出土し、それぞれの地域において有力者層の存在が想定される。

古墳時代であるが、古墳時代前期から中期にかけては各地で前方後円墳が首長墓に採用される時期である。遠賀川流域においても上流の嘉麻市所在の沖出古墳や下流の遠賀町所在の島津・丸山古墳群などの前期の前方後円墳が築造される。町内の古墳時代前期の古墳は迫古墳が知られる。主体部は粘土郭で覆われた木棺で、副葬品等は出土しないが、形態から前期古墳と位置づけられている。町内では以後目立った古墳の造営は行われていないようである。神崎遺跡では前期と考えられる石棺墓が確認されている。

古墳時代中期は前方後円墳が各地で築かれるとともに巨大化していく。また、横穴系の墓制が日本に導入された時期に当たる。流域の田川市ではセストノ古墳、猫迫古墳という2つの古墳が営まれる。セストノ古墳は朝鮮半島との関連が伺える横穴式石室を持ち、猫迫古墳は古墳時代中期の資料が少ない遠賀川流域の中で九州最古級の馬形埴輪などが出土し全国的にも有名である。また、5世紀後半には豊前北部で横穴墓の築造も開始される。行橋市の竹並横穴群や中津市の上の原横穴墓群に5世紀代にさかのぼると考えられる横穴墓が確認されている。町内では古墳時代中期には目立った古墳の造営もなく、現在確認できる横穴墓は6世紀前半頃であり不明な点が多い。

古墳時代後期になると各地で群集墳が築造される。福智町の位置する遠賀川流域は地質的な影響から横穴墓が群集墳として数多く造営される。町内でも例外ではなく数多くの横穴墓が造営されている。横穴墓群の数に反比例して横穴式石室を内部主体にもつ古墳の数は少ない。町内で確認されている後期古墳はわずかに数基である。遠賀川流域においても横穴式石室を内部主体とする古墳群は横穴墓群に比べ数は少ない。一部、宮若市のように横穴式石室墳が群集墳の主流となる地域もあるが、主流は横穴墓である。その中でも伊方古墳は墳丘径約32m、内部の横穴式石室は全長12m

を超え福岡県下でも有数の規模を持つ巨石墳である。保存整備に先立つ発掘調査の結果、少ないながらも金銅装の馬具等が確認され、地域首長の古墳であると考えられる。また町内では、神崎1号墳出土の獅嚙環柄頭という優れた副葬品が出土している。獅嚙環柄頭は全国的にも類例は少なく貴重な遺物である。神崎1号墳は周辺の状況から横穴墓の可能性もあり、そうであるなら首長墓に準ずる階層的横穴墓採用という横穴墓集中地域としての地域性の現れとして重要である。上流域の飯塚市では金銅装の帯金具などの豪華な副葬品が出土している槿山古墳が横穴墓と考えられている⁽¹⁾。遠賀川流域では、横穴墓という墓制が有力者層にも採用されていたことが想定できる。

古墳時代の集落であるが、現在のところ目だった集落の遺跡は発見されていない。町内でも古墳時代後期の群集墳は、横穴墓を中心に数百基存在すると考えられるが、現在までのところ、これら群集墳の造墓主体となる集落は確認されていない。古墳時代の土器が伊方丘陵の裾部や赤池の川底で発見されている。今後調査が進めば伊方の丘陵部や赤池の河岸段丘などで集落が発見される可能性がある。

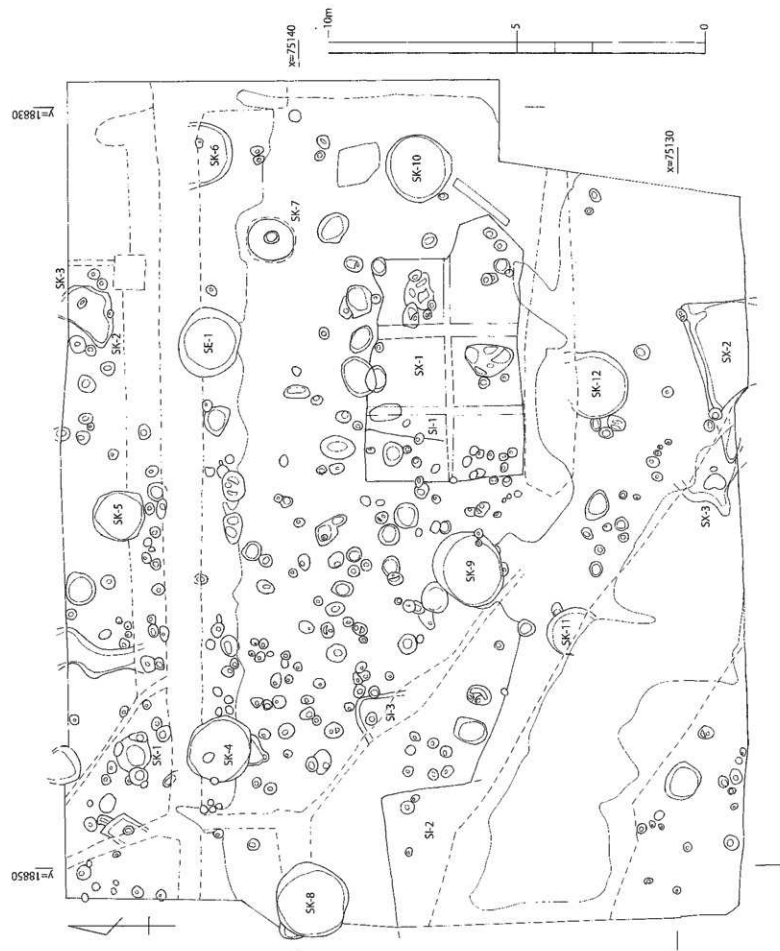
古代では伊方城園遺跡で掘立柱建物等が確認されている。また伊方の地名はその後伊方荘として文献にも散見される。伊方城園遺跡では鎌倉時代の建物も確認され、伊方石丸遺跡でも同時期の井戸が確認されている。伊方周辺は中世まで地域の中心地として人々が生活していたことが伺える。また上野興国寺は、室町時代に安国寺として創建され現代に続く古刹である。先に述べたように、足利尊氏の伝承も残り、近世豊前に人封された小笠原藩ゆかりの寺でもある。幕末には小笠原藩9代藩主の葬儀もここで行われた。

近世の周辺地域は細川氏、小笠原氏によって収められた豊前の地であった。彦山川流域では手永(大庄屋)と呼ばれる家が周辺の年貢の管理などを行っていた。その中でも金田手永六角家は有名である。現在の母屋は後世のものであるが、六角家には藩主が通る専用の門である御成門のある白壁、土蔵などが残り往時の姿をとどめている。現在国指定史跡を目指している城山横穴群はこの六角家の裏山であり、敷地の一角として手付かずのまま残されたといえる。横穴群の頂部には累代の近世墓も残っている。現在も町の特産品として400年の歴史を持つ上野焼は、文禄・慶長の役により日本へやってきた朝鮮陶工を招き細川氏により始められ、細川、小笠原の時代に藩窯として栄えた。町内には開窯である釜の口窯をはじめ、岩屋高麗窯、皿山本窯という古窯址も存在しその歴史の深さを今に伝えている。この上野焼の故地とされる韓国泗川市とは上野焼400年祭を契機に現在も小学生の交流が続いている。

近代は、周辺を含め筑豊地区全体が炭鉱とともに発展していった。町内でも三菱方城炭鉱、明治赤池鉱業所など大資本による大規模炭鉱をはじめ、数多くの中小炭鉱が創業し活気にあふれていた。現在ではボタ山等にわずかにその面影を残すのみとなっている。その中でも三菱方城炭鉱の赤煉瓦建物は現在日立マクセル株式会社九州事業所の敷地内に数棟残り、国登録文化財の九州日立マクセル赤煉瓦記念館を始め今でも活用され、筑豊の近代化を物語る資料として筑豊の歴史を見守っている。

註

(1) 嶋田光一・1991「福岡県槿山古墳の再検討」『古文化論叢』児嶋隆人先生喜寿記念論集



第4図 伊方小学校遺跡第4地点遺構配置図 (1/100)

Ⅲ 調査の記録

1. 調査の方法

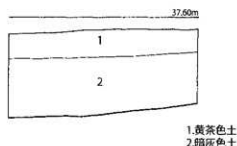
平成 23 年 5 月 17 日よりバックホーを用いて試掘調査での遺構深度を基に表土の除去を行った。表土の除去と平行して人力による遺構検出を開始した。その後調査区中央付近の SX3 より掘削を開始した。平成 23 年 8 月 31 日航空写真撮影を行い、平成 23 年 9 月 15 日に終了した。

遺跡の時期は弥生時代が主体であり、主な検出遺構は竪穴住居 3 棟、土坑 12 基、その他の遺構 3 基である。

2. 基本層序

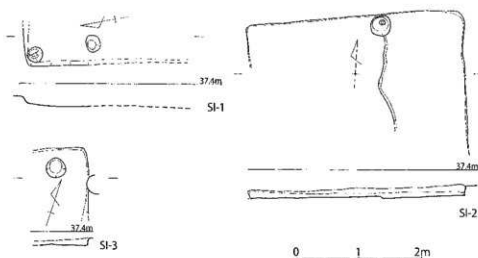
1 層は黄茶色土、2 層は暗灰色のボタが混入する客土である。3 層は地山である。1、2 層はの造成の際に持ち込まれた客土と考えられ斜面の傾斜に沿って南側は厚く堆積する。

遺構、遺物は 3 層の地山上で検出している。



第 5 図 基本層序 (1/40)

3. 住居



第 6 図 SI1 ～ SI3 実測図 (1/60)

SI1

SX3 内部で検出した。住居の東側部分のみ残存していた。残存している部分で深さは 0.1 ～ 0.2m ほどを検出している。北西の隅部にピットが残存し柱穴の一つと考えられる。

遺物

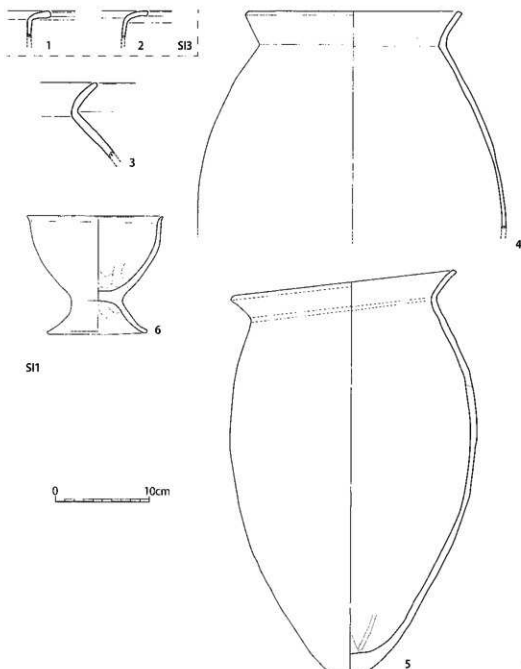
1、2ともに弥生土器の口縁部片であり、口縁部外面にはナデの痕跡が確認できるが、他は風化が激しく不明瞭である。1は口縁部の折り返しはきつく、口縁端部を肥厚させる。2は口縁部の折り返しはやや緩く、口縁端部は薄い。

SI2

調査区東側で検出した。住居北東の隅部のみ残存していた。残存している部分で深さは0.1mほどを検出している。SI1 同様隅部付近にピットを検出し柱穴の一つと考えられる。

SI3

調査区の西端付近で検出した。比較的残存状況がよく、半分ほど検出できた。南半部分は後世のかく乱により削平される。北半部分で堆積土、地山とは異なる黒灰色の貼床と考えられる硬化面を



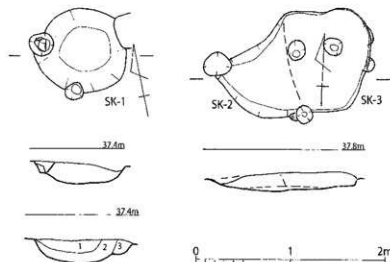
第7図 SI1・SI3出土遺物実測図(1/4)

検出した。

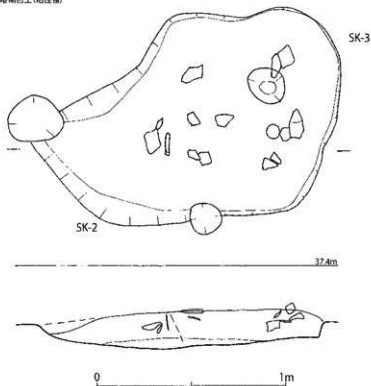
住居東半は貼床の除去後、さらに掘削可能であり住居床面の確認のため掘り下げた。西半部分より5cmほど段差があることを確認した。ピットは貼床の下から一カ所検出している。住居内に土坑等は確認していない。

遺物

3～5は弥生土器の甕である。3は口縁部片、4は口縁部から体部にかけて、5はほぼ完形の甕である。4は復元口径22.2cm、残存高22.9cm、5は口径23.2cm、底径4.4cm、器高42.4cmを測る。いずれも口縁部はくの字状で、3の調整は風化により不明瞭であるが、4、5では口縁部の内外に横ナデが確認でき、4では体部にはハケ目、5はタタキによる調整を施す。



1.赤褐色土(ピット埋土)
2.暗褐色土(赤褐色土埋)
3.暗褐色土(地盤土)



6は弥生土器の脚付鉢である。ほぼ完形であり、復元口径13.9cm、底径10.1cm、器高12.2cmを測る。内面にはナデの痕跡が明瞭に残る。鉢部の断面には接合痕が確認できる。

4. 土坑

SK1

調査区北東隅で検出した。南北0.9m、東西1.0m、深さ0.2mほどの円形の上坑である。堆積状況は1層はピット埋土であり、ピットを切るように掘られている。2層、3層はレンズ状に堆積しており廃棄後に堆積したと考えられる。

遺物

1は須恵器環の口縁部片である。内外面ともに横ナデ調整を施す。内外面ともに灰白色を呈し、胎土は精緻であり焼成は良好である。

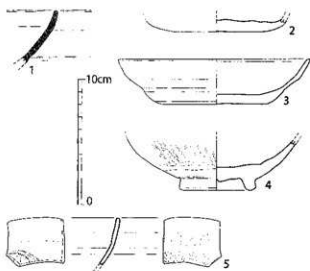
2、3は土師器環である。2は底部から体部にかけて、3は一部欠失するがほぼ完形に復元できる。復元口径15.3cm、器高3.6cmを測る。2は内外面ともに横ナデ調整を施し、底部は糸切り後ナデ調整を施す。3は内外面ともに横

第8図 SK1～SK3実測図(1/40)・SK2・SK3遺物出土状況図(1/20)

ナデ調整を施し、底部はへら切り後ナデ調整を施す。内外面ともに淡黄色を呈し、胎土はやや粗く焼成は良好である。

4は施釉陶器の底部から体部にかけての破片である。外面底部はへら削りを施し、高台部分は削り出しにより整形している。釉薬は暗い浅黄色を呈し内面は見込み部分まで、外面は底部付近まで施される。胎土は暗い灰色を呈する。外面にはへら描きによる文様が施される。胎土は精緻であり、焼成は良好である。

5は青磁碗の口縁部である。内面にはへら描きによる花文と櫛目文を施す。釉薬は黄色みのある緑色を呈し、胎土は淡灰色を呈する。胎土は精緻であり焼成は良好である。



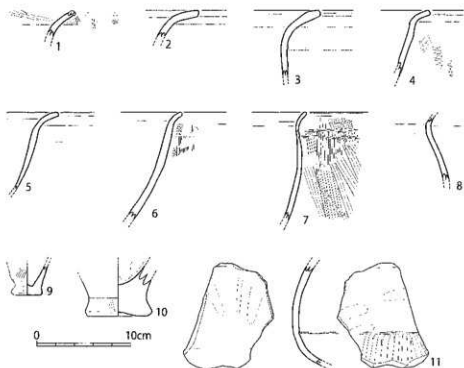
第9図 SK1 出土遺物実測図 (1/3)

SK2・SK3

調査区西半部分の北端で検出した。本来は2基の土坑と考えられる。SK2は南北1.07m、東西0.85mほどの不正方形、SK3は南北の最も広い部分で1.1m、東西0.8mほどの西側を頂点とした三角形の土坑である。

遺物

1～7は弥生土器甕の口縁部片である。1～3の口縁端部は外へ強く屈曲し、4、5はくの字状に、6、7は緩やかに反する。1の外面はハケ目、内面はミガキ調整が確認できる。2、3の外面はハケ目後ナデ調整、口縁部外面から内面はナデ調整を施す。3の外面には口縁部の屈曲部付近に



第10図 SK2・SK3 出土遺物実測図 (1/4)

段を有する。4は外面ハケ目調整、口縁外面から内面はナデ調整を施す。5は外面の調整は摩滅し不明瞭であるが、内面はナデ調整を施す。7は外面にハケ目調整を施し、口縁部の屈曲部付近に2条の沈線が巡る。内面は摩滅し不明瞭である。

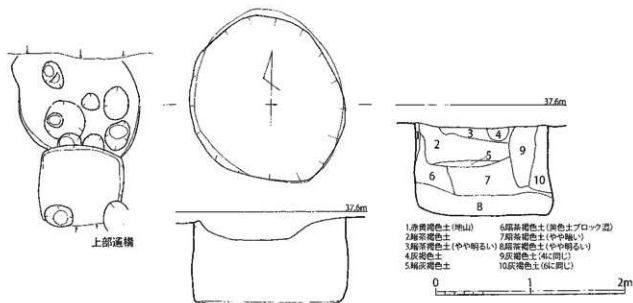
9、10は弥生土器の甕底部である。9は大きさからミニチュア土器であろう。9は底部径2.7cmを測る。外面下部には指頭圧痕、上部にはハケ目調整、内面には指頭圧痕が確認できる、焼成は良好である。10は底部径6.4cmを測る。外面はハケ目後ナデ調整、内面には指頭圧痕が確認できる。11は壺の頸部片である。外面の体部はミガキ調整、体部と頸部との境は沈線を施しそれより上部はナデ調整、内面はナデ調整を施す。

SK4

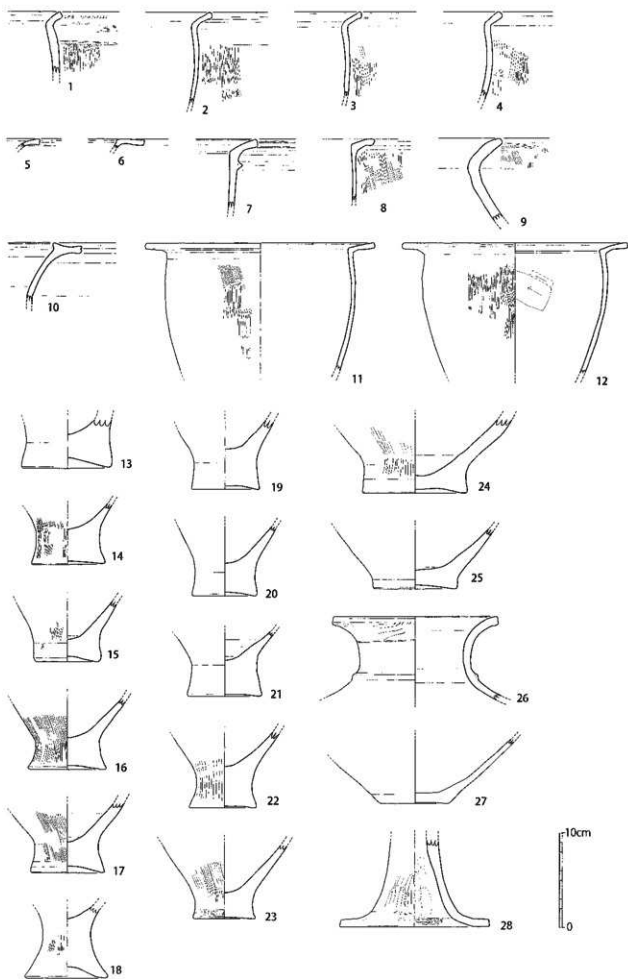
調査区西半部分の北端で検出した。遺構検出時点では南端を方形の土坑に切られ、北半では複数のピットを検出していた。下層に円形の土坑状の埋土が確認できるため上面を図化後掘り下げを行った。結果貯蔵穴と考えられる南北1.38m、東西1.65m、深さ0.94mの土坑を検出した。

遺物

1～9は甕の口縁部片である。1～4は口縁部はくの字状に屈曲する。1は外面体部上部に沈線が巡り、沈線より下部はハケ目調整が明瞭に残り、それより上部から内面にかけてナデ調整を施す。外面のナデ調整はハケ目の後に施され、部分的にハケ目を確認できる。口縁端部には刻み目による文様が施されている。2は外面の体部はハケ目調整、体部上部から口縁部、内面にかけてナデ調整を施す。3、4はともに外面はハケ目調整、口縁部外面から内面にかけてナデ調整を施す。5は細片であり断定はできないものの6と同様、鋤先状口縁の破片である。5は内外面ともにナデ調整を施す。6は摩滅し調整は不明瞭である。7の口縁部は強く屈曲し、口縁下部に断面三角形の突帯を貼付ける。調整は不明瞭であるが、口縁部の内外面はナデ調整が確認できる。8は口縁部が水平に近く屈曲した甕の口縁部である。体部外面はハケ目調整、口縁部外面から内面にかけてナデ調整を施す。9はくの字状に屈曲する甕の口縁部である。他の破片よりやや厚く、外面は口縁端部



第11図 SK4 実測図 (1/40)

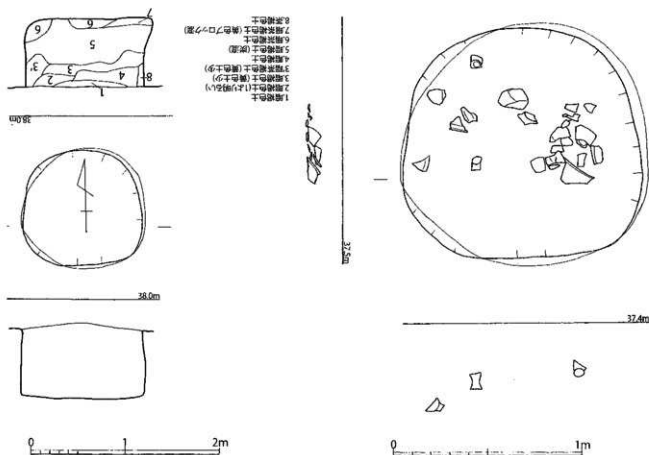


第12图 SK4出土器物失测图(1/4)

付近までハケ目調整、内面はナデ調整を施す。10は壺の口縁部片である。内外面ともにナデ調整を施し、口縁部は鋤先状となる。11、12は小型の甕と考えられる体部から口縁部にかけてである。作りはよく似ており、口縁部は強く屈曲しほぼ水平となる。11は復元口径23.8cm、12は復元口径24.2cmを測る。ともに外面体部はハケ目調整、口縁部外面から内面にかけてはナデ調整を施す。

13～25は弥生土器甕の底部である。底部形は15、20、23のように7.0cm前後のもの、14、16、17、19、21、22のように8.0cm前後のもの、13、18、25のように9.0cm前後のものに大きく分かれる。24は10.9cmとやや大型である。13、19、20、21では調整は不明瞭であるが、確認できるものでは外面はハケ目調整、外面底部と内面はナデ調整を施す。21、22、23は平底に近いものの、底部の特徴は大半が上げ底状である。24、25は他に比べ大型の器形になると考えられ、底部中央はくぼみ、上げ底状となる。焼成は全体的に良好である。

26、27は弥生土器の壺である。26は口縁部から頸部にかけて、27は底部片である。26は復元口径17.2cmを計り、内外面ともに確認できる部分ではナデ調整を施す。頸部下部には断面三角形の突帯を廻らし、上部には沈線が廻りヘラ状工具によるヘラ記号上の文様を施す。口縁部には刻目による文様を施す。27の底部はやや上げ底状を呈し、底部形7.1cmを計り、調整は摩滅し不明瞭である。28は弥生土器の高坏脚部である。底部の復元径は15.9cmを測り、外面には磨き調整、内面は底部付近にハケ目調整、他はナデ調整を施す。



第13図 SK5実測図(1/40)・遺物出土状況図(1/20)

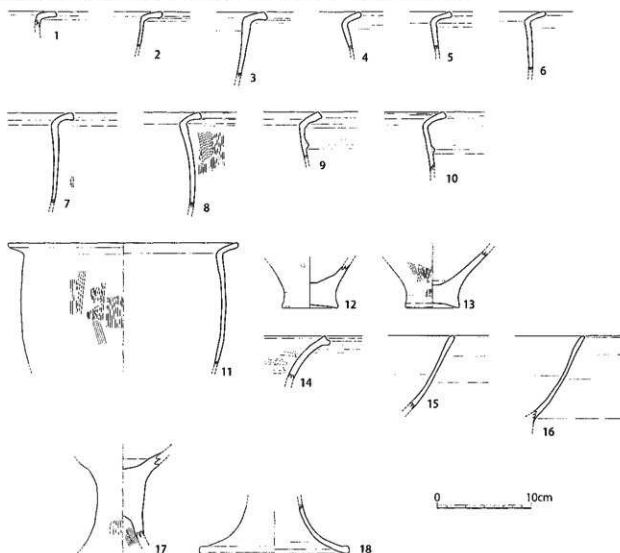
調査区中央部北端付近で検出した。貯蔵穴と考えられ、南北 1.19m、東西 1.38m、残存している部分で深さ 0.72m であり、東半部の底部はやや外に広がり袋状を呈する。北半で遺物がまとまって出土した。

1～4 層は暗褐色土であり、部分的に黄色土や黄色の砂質土を含み 4 層中からは土器片が出土している。これらの層は不規則に堆積し後世の埋土と考えられる。5、6 層は暗茶褐色土であり、5 層中から図化した土器が出土している。5 層から下層が本来の埋土であろう。

遺物

1 から 10 は弥生土器甕の口縁部付近の破片である。1 から 3 と 5、6、7 の口縁部は水平に近く強く屈曲する。他はややゆるく、くの字を呈する。9、10 口縁下部に断面三角形の貼付突帯が廻る。調整は確認できるもので体部外面はハケ目調整、口縁部から内面にかけてはナデ調整を施す。焼成は全て良好である。

11 は弥生土器甕の口縁部から体部にかけてである。口縁はやや屈曲が強く、復元口径は 24.3cm を測り、外面はハケ目調整、口縁部外面から内面にかけてナデ調整を施す。12、13 は弥生土器甕の底部である。ともに底部は上げ底状を呈し、12 は底部径 5.8cm、13 は底部径 5.5cm を計る。体部外面はハケ目調整後、ナデ調整、底部外面と内面にはナデ調整を施す。

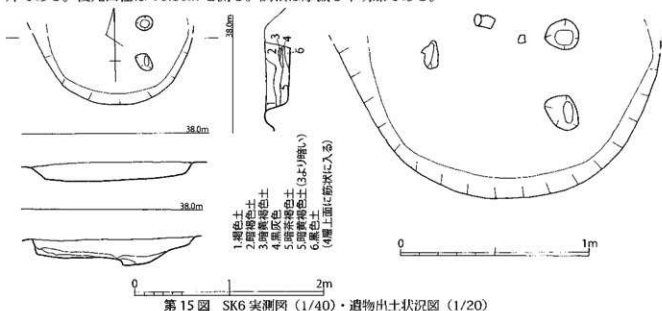


第 14 図 SK5 出土遺物実測図 (1/4)

14 は弥生土器壺の口縁部片である。外面はナデ調整、内面は磨き調整を施す。

15、16 は弥生土器鉢の体部から口縁部片である。ともに内外面ともにナデ調整を施す。16 は体部下部の形態から脚付の鉢になる可能性がある。

17、18 は弥生土器の高坏脚部である。17 は脚端部、坏部を欠失する。調整は不明瞭であるが、確認できる部分では外面はハケ目調整、脚部内面には粗いハケ目を確認できる。18 は脚端部の破片である。復元口径は 15.5cm を測る。調整は摩滅し不明瞭である。



第 15 図 SK6 実測図 (1/40)・遺物出土状況図 (1/20)

SK6

調査区の北西隅で検出した。東西 1.7m、南半部分のみ残存し、深さ 0.2m ほどの貯蔵穴と考えられる土坑である。北半部分は後世のかく乱により削平されていた。

堆積状況であるが、1、2 層は褐色土であり 2 の方が暗い。2 層の下部 3～4 層の上部で遺物を検出している 3～4 層はこの遺構の本来の埋土であろう。

遺物

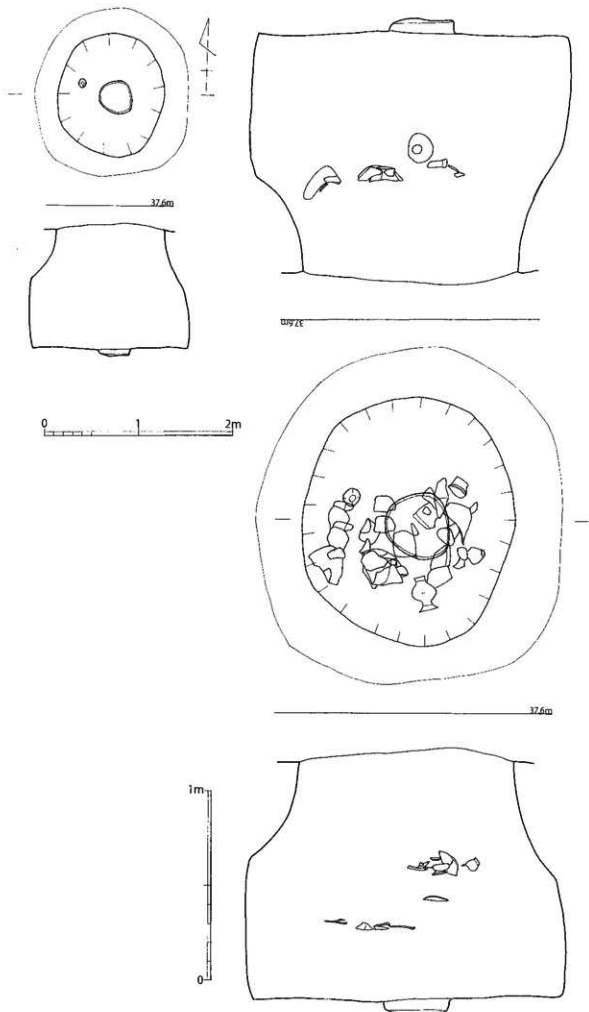
1 は弥生土器壺の底部である。底部径 5.9cm を測り、外面はハケ目調整、底部付近はナデ調整、内面はナデ調整を施す。

SK7

調査区北西で検出した。上部は南北 1.3m、東西 1.13m、底部は南北 1.75m、東西 1.65m の断面袋状の貯蔵穴と考えられる土坑である。底部には中央付近にはビットが掘られている。埋土は単一層であるが、床面よりやや浮いた状態でまとまった量の遺物が出土した。ほぼ同時期の遺物であり、一括して廃棄されたのであろう。

遺物

1 からは弥生土器壺の口縁部から体部にかけての破片である。一部調整は不明瞭なものがあるが、外面はハケ目調整を施し、内面はナデ調整を主体とする。7 では外面に粗い磨き調整、14 は内部に磨き調整を確認できる。4、8、9、14、15、16、20、21、23、では口縁部下部に沈線が廻る。17 では口縁部内面にまでハケ目調整を施す。



第16図 SK7 実測図 (1/40)・遺物出土状況図 (1/4)

25 から 37 は弥生土器甕の底部である。外面はハケ目調整を施し、内面はナデ調整を主体とする。底径は 5.0cm 台の 28、35、36、6.0 から 7.0cm の 29、32、34、7.0cm 以上のもの 30、31、35、8.0cm 以上の 33 がある。28、29、30、32、34、35 では底部は上げ底状となる。

38、39、40 はほぼ関係に復元できる弥生土器の甕である。38 は口径 23.4cm、底径 6.2cm、器高 27cm を測る。外面ハケ目調整、内面はナデ調整を施し、口縁下部には沈線が廻る。39 は口径 21.7cm、底径 7.4cm、器高 30cm を測る。外面ハケ目調整、内面はナデ調整を施す。40 は口径 29.1cm、底径 9.7cm、器高 25cm を測る。内外面ハケ目調整の後磨き調整、内面は体部上半から口縁部にかけてナデ調整を施し、体部は大きく外に開く。

41 は弥生土器の甕底部である。外面はハケ目調整、内面はナデ調整を施し、焼成前の穿孔による孔が一つ確認できる。

42 から 48 は弥生土器の壺である。42 は口縁部片であり外面にはナデ調整を施し、頸部との境目付近に 2 条の沈線が廻る。43 から 45 は肩部片である。43 は沈線が廻り、沈線を挟んで上部は貝殻による連弧文、下部は貝殻による重弧文を施す。44 は上部に突帯が廻り、その下部に羽状文とくし描きによる連弧文を施す。45 は 2 段の羽状文を施し、下段は中央に線が確認でき綾杉文状となる。その下部には連弧文を施すと考えられる。内面には磨き調整が確認できる。46 は口縁端部を欠失するが、底部径 4.0cm、残存高 12.75cm を測る。頸部と口縁部の境目付近には沈線が廻り、肩部付近には羽状文とくし描きによる連弧文を施す。47 はほぼ完形であり、復元口径 8.6cm、底部径 5.35cm、器高 18.25cm を測る。頸部と口縁部の境目付近には断面三角形の突帯が廻り、肩部付近に羽状文状の文様とくし描きによる連弧文を施し、体部外面から底部にかけて磨き調整を施す。特徴的な部分として底部に焼成前と考えられる穿孔が確認できる。48 は底部片である。外面には磨き調整を施し、内面はナデ調整を施す。

49 は弥生土器の鉢である。外面はハケ目調整を施し、内面はナデ調整を施す。

50 は弥生土器壺の口縁部から体部にかけてである。復元口径 20.5cm を測り、口縁部と頸部の境目付近には 2 条の沈線が廻り、頸部と体部の境目付近には断面三角形の突帯が廻る。外面はハケ目調整の後磨き調整を施し、内面はナデ調整を施す。

51 は大型の弥生土器壺の口縁部から体部にかけてである。復元口径 26.8cm を測り、口縁部と頸部の境目付近には断面三角形の突帯が廻る。外面は磨き調整を施し、内面は口縁部から肩部付近まで磨き調整、それより下部はナデ調整を施す。

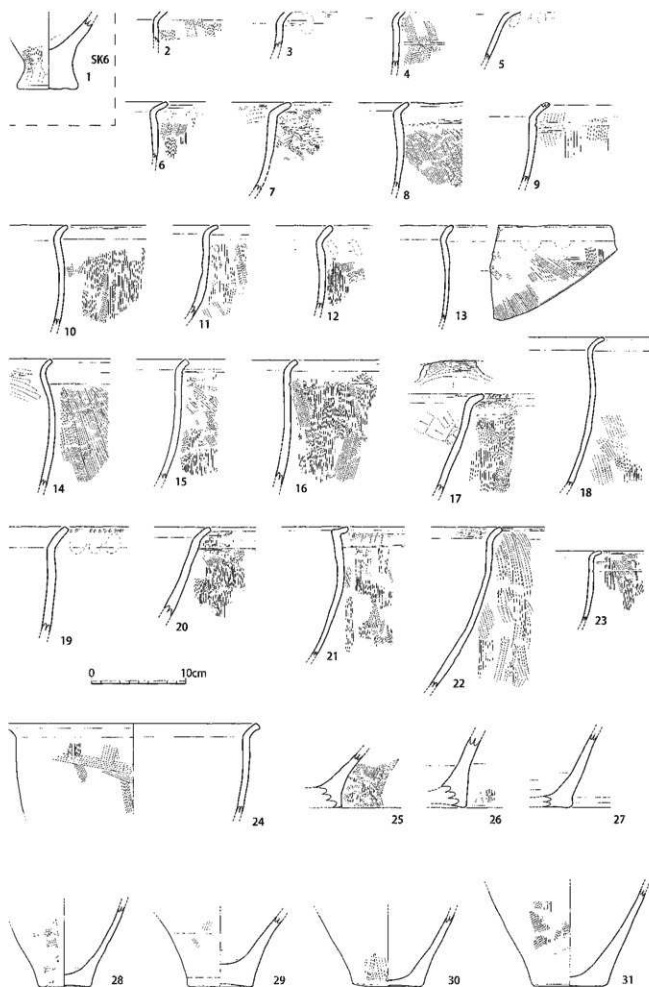
SK8

調査区東端で検出した。南北 1.87m、東西 1.76m、残存する深さ 0.42m の貯蔵穴と考えられる土坑である。埋土中より遺物が出土している。

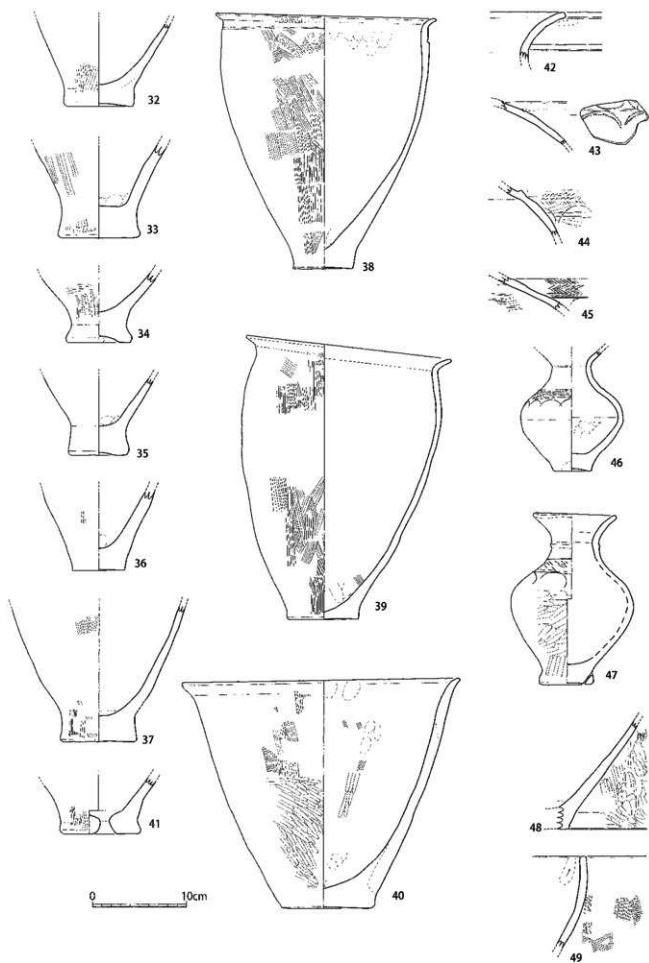
遺物

1 は弥生土器甕の口縁部から体部にかけてである。外面はハケ目調整、内面はナデ調整を施す。

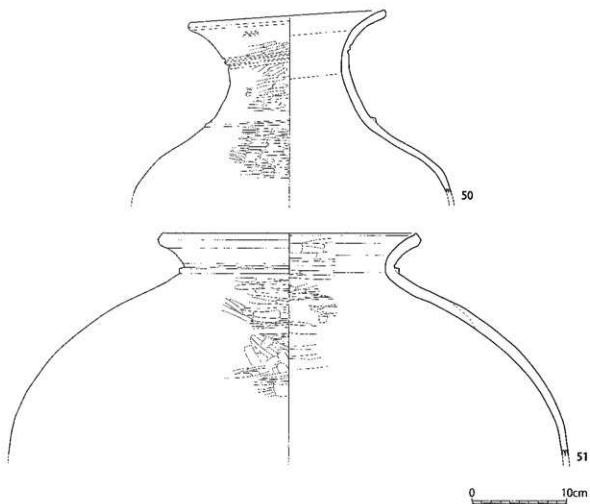
2 は弥生土器甕の体部から底部にかけてである。外面はハケ目調整、底部はナデ調整、内面はナデ調整を施す。底径は 5.0cm を測り、底部は上げ底となる。



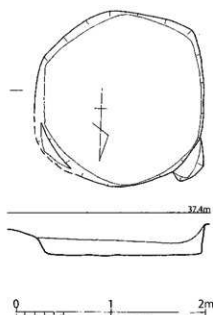
第 17 图 SK6 出土遺物実測図・SK7 出土遺物実測図 1 (1/4)



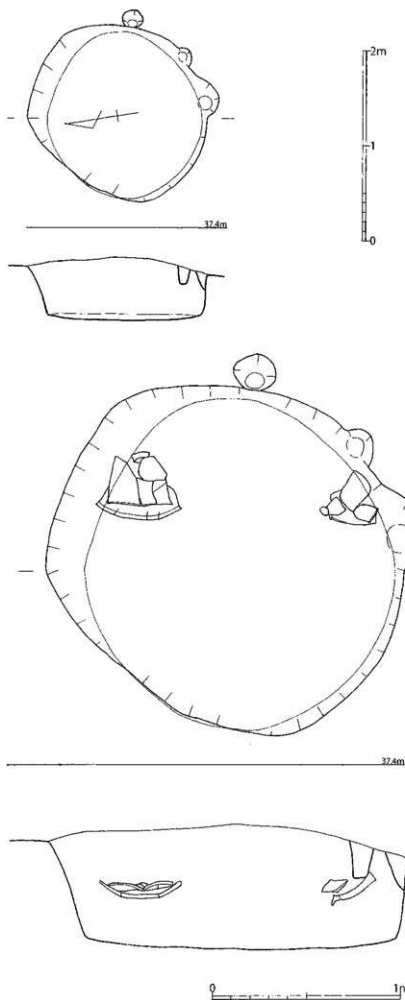
第18图 SK7 出土遺物実測図2 (1/4)



第19図 SK7 出土遺物実測図3 (1/4)



第20図 SK8 実測図 (1/40)



第21図 SK9実測図(1/40)・遺物出土状況図(1/20)

SK9

調査区中央付近で検出した。南北1.86m、東西1.8m、残存している部分で深さ0.69mの貯蔵穴と考えられる上坑である。床面付近で遺物を検出した。

堆積状況であるが、1、3、9層の暗褐色土は表層である。その下層には4層が広範囲に堆積し遺物が出土している。この土坑は埋没後に廃棄土坑として利用された可能性もある。

遺物

4、5は弥生土器の甕である。4は復元口径20.1cm、底径6.0cm、器高21.5cmを測る。口縁部下部に沈線が廻り、口縁炭部には刻み目を施す。外面ハケ目調整、底部はナデ調整、内面はナデ調整を施す。

5は復元口径24.9cm、底径8.3cm、器高29.5cmを測る。口縁部下部に沈線が廻る。外面ハケ目調整、底部はナデ調整、内面はナデ調整を施す。

SK10

調査区東端で検出した。埋土中よりまとまった量の遺物を検出した。遺物は主に4層中より出土している。調査区西端で検出した。南北1.68m、東西1.6m、残存している部分で深さ0.85m

の貯蔵穴と考えられる土坑である。

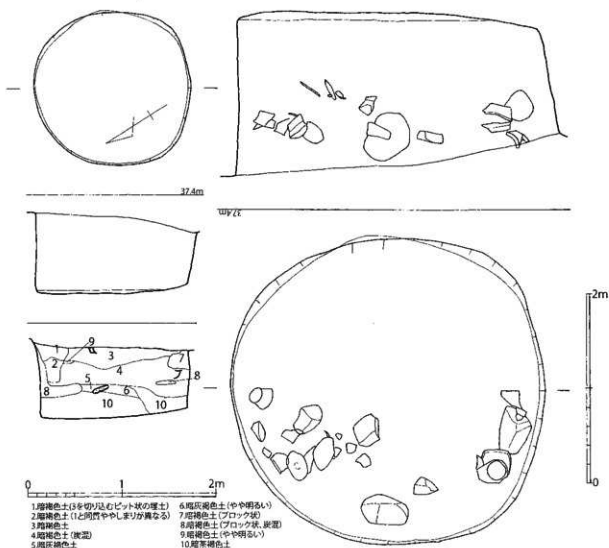
遺物

6、は弥生土器甕の口縁部から体部にかけてである。6は口縁下部に二条の沈線が廻り、外面ハケ目調整、口縁部外面から内面にかけてナデ調整を施す。口縁部内面にはハケ目調整の後ナデ調整を施している。7は口縁部下部に一条の沈線が廻り、外面の調整は不明瞭である。内面はナデ調整を施す。

8～11は弥生土器甕の、である。底径7.0cm程度の8、10、底径5.0cmとやや小さい9、底径7.8cmの11がある。8、10は底部が上げ底状となる。

10の外面調整は不明瞭であるが、内面はナデ調整を施す。8、11は外面ハケ目調整、底部外面はナデ調整を施し、内面はナデ調整を施す。

12はほぼ関係に復元できる弥生土器の甕である。口径16.3cm、底径5.5cm、器高20.5cmを測る。口縁下部には沈線が廻り、口縁炭部には刻み目を施す。外面はハケ目調整、体部下部はハケ目



第22図 SK10実測図(1/40)・遺物出土状況図(1/20)

調整の後ナデ調整を施す。底部外面、内面はナデ調整を施す。

13 は弥生土器の甕底部である。調整は不明瞭であるが、底部外面付近ではハケ目調整の後ナデ調整を施す。底部中央付近に焼成前穿孔を行う。

14、15 は弥生土器甕である。14 は口縁部片であり、外面はハケ目調整が部分的に残り、ケ目調整の後磨き調整を施す。内面にも部分的にハケ目があり、ハケ目調整の後ナデ調整を施す。15 は口縁部から頸部にかけてである。外面は頸部と体部の境目付近に断面三角形の突帯が廻り、突帯下部に羽状文を施す。口縁部外面はハケ目調整の後ナデ調整を施し、内面はナデ調整を施す。

16～17 は弥生土器甕の底部である。16～18 の底径はそれぞれ 7.0cm、10.5cm、9.0cm を測る。19 は底径 6.6cm を測り、外に比べ体部の開きは弱い。摩滅し外面調整は不明なものもあるが、17 では底部付近に磨き調整、19 は残存部全面に磨き調整を施し、底部はナデ調整を施す。内面は確認できる 18、19 でナデ調整を施す。

20 は弥生土器の器台である。上端部の径は復元 9.5cm、下端部の径は復元 9.9cm を測る。外面は中央部付近にハケ目調整が残り、その上下はハケ目調整後ナデ調整を施す。内面はナデ調整を施す。

SK11

調査区の南東で検出した。北半部分のみ残存する東西 1.35m、深さ 0.2m の土坑である。

遺物

1 は弥生土器甕の口縁から体部にかけてである。復元口径 28cm を測り、口縁端部には刻み目を施し、口縁下部には 2 条の沈線が廻る。外面は確認できる部分ではハケ調整を施し、内面はナデ調整を施す。

2、3 は弥生土器甕の底部である。2 は底径 6.9cm を測り、外面は不明瞭であるがナデ調整、内面はナデ調整を施す。3 は底径 9.3cm を測り、やや大型である。外面はハケ目調整、底部はナデ調整を施し、内面はナデ調整を施す。

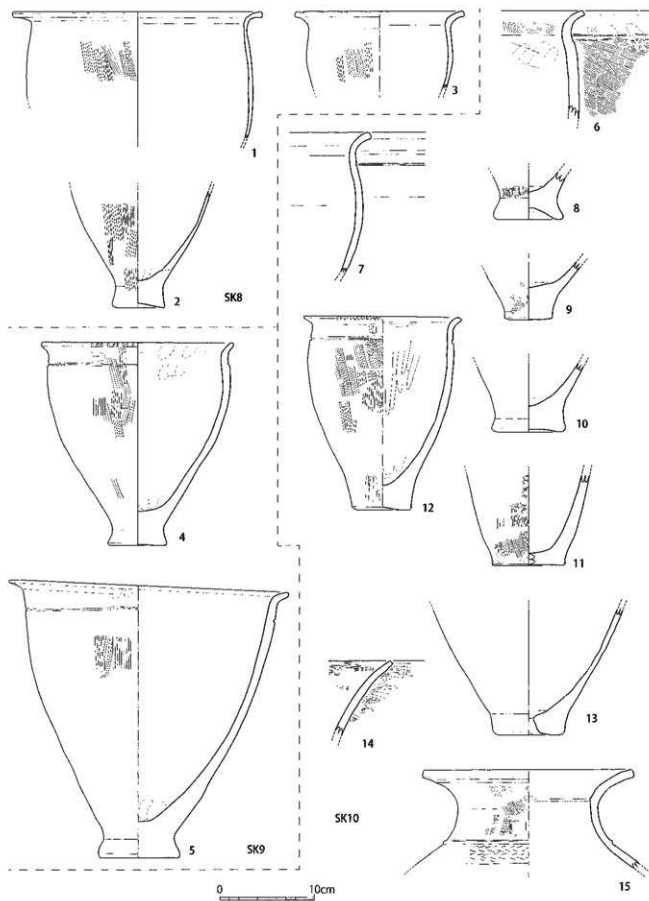
4 はほぼ完形に復元できる弥生土器の甕である。口径 17.2cm、底径 6.8cm、器高 22cm を測る。外面は残る部分ではハケ目調整、内面口縁部には磨き調整、体部から底部はナデ調整を施す。底部は上げ底状となる。

SK12

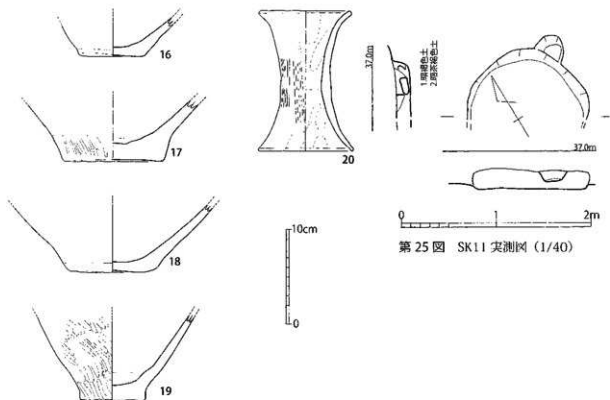
調査区の南西で検出した不整形の土坑と下層の貯蔵穴と考えられる土坑である。北側は校舎の基礎によりかく乱を受けるが、上部の遺構は残存している部分で南北 1.1m、東西 1.65m、深さ 0.1m、下層の遺構は残存している部分で東西 1.66m、深さ 0.54m である。下層の遺構からまとまった量の遺物が出土した。

遺物

5～17 は弥生土器甕の口縁部から体部にかけてである。5～13 の外面はハケ目調整、口縁部外面から内面は根で調整を施す。14 は内外面ともにナデ調整を施す。5、8 では口縁端部を肥厚させ、9、13 は上方へつまみあげている。14 の口縁部は平坦で鋤先状となる。15 は復元口径 26.4cm を測り、調整は不明瞭であるが口縁部にナデ調整が確認できる。16 は復元口径 27.6cm を測り、外



第 23 图 SK8・SK9・SK10 出土器物实测图 (1/4)



第24図 SK10 出土遺物実測図 (1/4)

第25図 SK11 実測図 (1/40)

面はハケ目調整、口縁部外面から内面にかけてナデ調整を施す。17は復元口径25.7cmを測り、外面はハケ目調整、口縁部外面から内面にかけてナデ調整を施す。

18～23は弥生土器甕の底部である。底径は6cm台の19、21、7cm台の18、20、22、やや人型の8cm台の23があり、上げ底状を呈する。外面はハケ目調整、底部外面から内面はナデ調整、内面はナデ調整を施す。

24は弥生土器壺の口縁部である。復元口径29.3cmを測り、口縁端部は肥厚する。外面の調整は不明瞭であるが、内面はナデ調整を施す。

25、26は弥生土器壺の底部である。底径7.3cmを測り、外面は磨き調整、内面はナデ調整を施す。底径6.9cmを測り、外面の調整は不明瞭であるが、内面はナデ調整を施す。

27は弥生土器の脚付鉢である。脚部は低く、内外面ともに磨き調整を施す。

27は弥生土器の器台である。脚部は低く、外面はハケ目調整を施し、内面はナデ調整を施す。

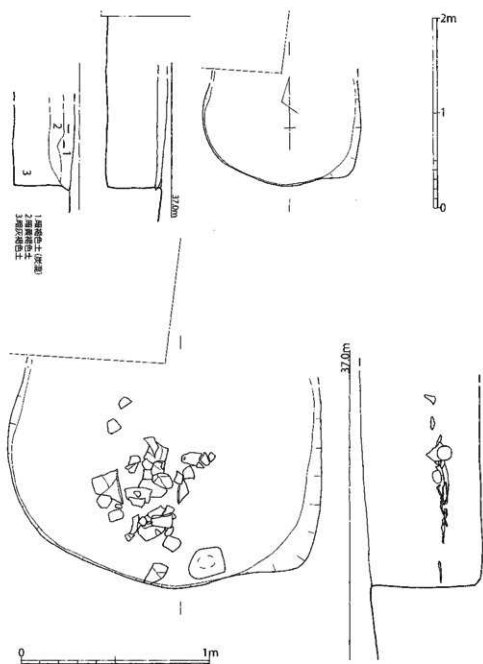
5. 井戸

SE1

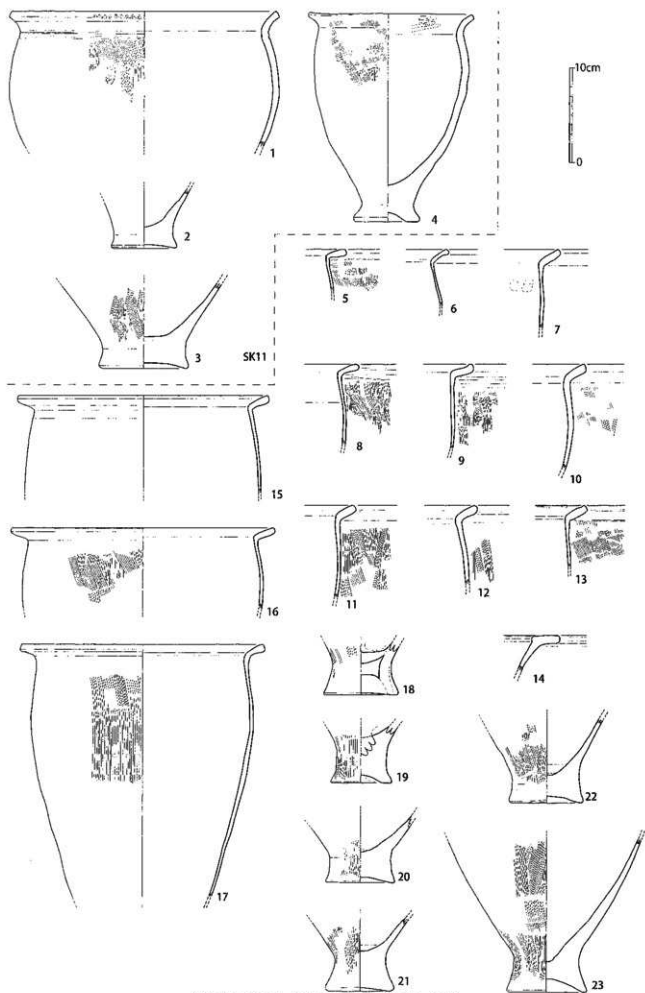
調査区北東で検出した。南北1.53m、東西1.58m、深さは湧水のため2.0mまで掘削した時点で中止した。床面には石材が投げ込まれ、壁面中央付近には足掛けのためかビットが掘られている。

遺物

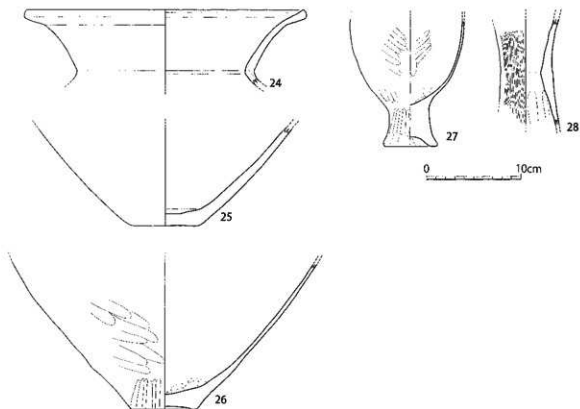
1は青磁碗の口縁部片である。釉は緑色を呈し、胎土は灰白色で精緻である。2も青磁鉢の口縁部片である。釉は緑色を呈し、胎土は灰白色で精緻である。



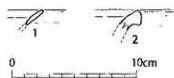
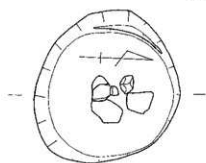
第 26 図 SK12 実測図 (1/40)・遺物出土状況図 (1/20)



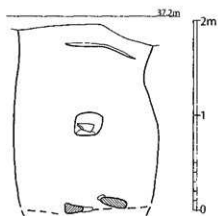
第 27 图 SK11·SK12 出土器物火刺图 1 (1/4)



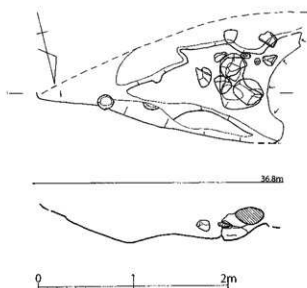
第 28 図 SK12 出土遺物実測図 2 (1/4)



第 30 図 SE1 出土遺物実測図 (1/3)



第 29 図 SE1 実測図 (1/40)



第 31 図 SX1 実測図・遺物出土状況図 (1/40)

6. その他の遺構と遺物

SX1

調査区南端で検出した。不整形の土坑状の遺構である。東半部分で石材の集積を検出した。

SX2

調査区南端で検出した。不整形の土坑状の遺構である。床面より遺物を検出した。遺物には丹塗りの土器が含まれ祭祀に関係する遺構の可能性もある。

遺物

1、2は弥生土器甕の口縁部である。形態は良く似ており、口縁部はくの字状に屈曲し、口縁部下部に断面三角形の突帯が廻り、口縁端部は上方につまみあげる。口縁部外面から内面にかけてナデ調整を施し、2では外面にハケ目調整が施される。

3はほぼ完形に復元できる弥生土器の甕である。復元口径 15.5cm、底径 6.6cm、器高 19.4cm を測る。外面はハケ目調整後ナデ調整、口縁部外面から内面はナデ調整を施す。

4は弥生土器壺の底部である。復元底径 5.0cm を測り、外面はハケ目調整、内面はナデ調整を施す。

5は弥生土器鉢である。復元口径 13.4cm、復元底径 4.8cm、器高 11.8cm を測る。外面はナデ調整が部分的に残り、内面はナデ調整を施す。

SX3

調査区の中央付近で検出した、深さ 0.2m ほどの浅いくぼみ状の遺構である。埋土は黒灰色土の単一層であり、堆積層と考えられる。内部より削平された住居址を検出している。

出土石器

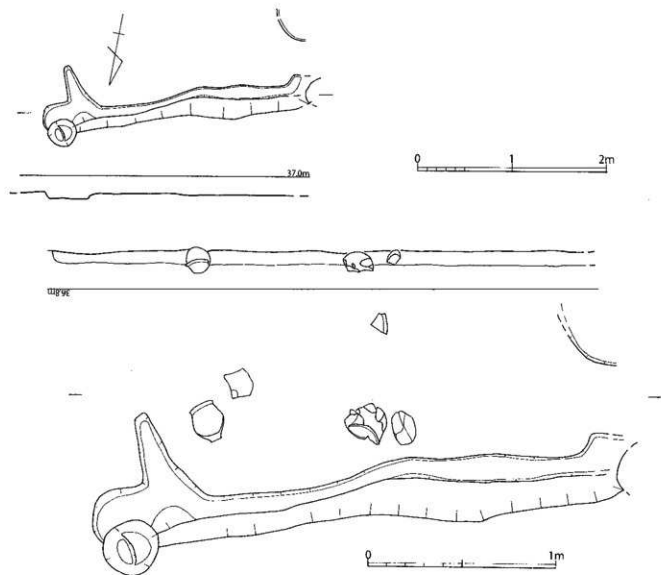
1、2は打製石鏃である。1は平基式の石鏃である。姫島産黒曜石製で右基端を欠失する。2はSX3出土、大きく挟りの入る、凹基式の石鏃である。サヌカイト製で右基端を欠失する。

3、4は外湾刃半月形の石包丁である。3はSX2出土、片岩製の石包丁である。刃部には微細な使用痕が残る、整形時の研磨痕はあまり残っていない。4はSX3出土、粘板岩製の石包丁である。刃部には微細な使用痕、孔にはひもずれの痕跡が残る。表面には自然面が残る、表裏ともに研磨痕はあまり目立たない。

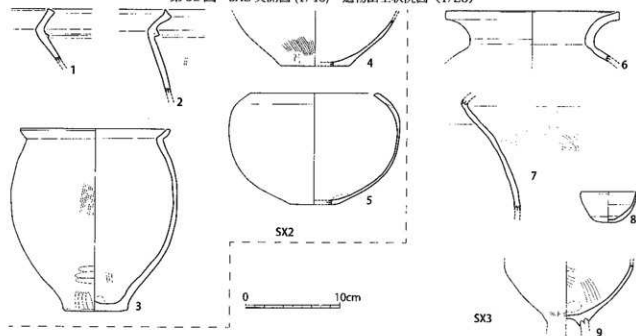
5はSK10出土、頁岩質砂岩製のスクレイパーである。刃部には2次加工の微細剥離が施され、孔の痕跡が確認できることから大型の石包丁の2次利用の可能性も考えられる。

6はSX-3出土の片岩製の磨製石斧である。刃部付近のみ残存する。

7～11は砥石である。7、8は小形の手持ち用と考えられる粘板岩性の砥石である。7はSK7出土、両側面は自然面が残る、表裏砥面として使用する。8は4面とも砥面として使用している。9はSK9出土、仕上げ砥と考えられる砂岩製の砥石である。欠失する部分があるが、3面を砥面として使用する。10はSK9出土、中砥と考えられる砂岩製の砥石である。11はSK10出土、中砥



第32図 SX2 実測図 (1/40)・遺物出土状況図 (1/20)



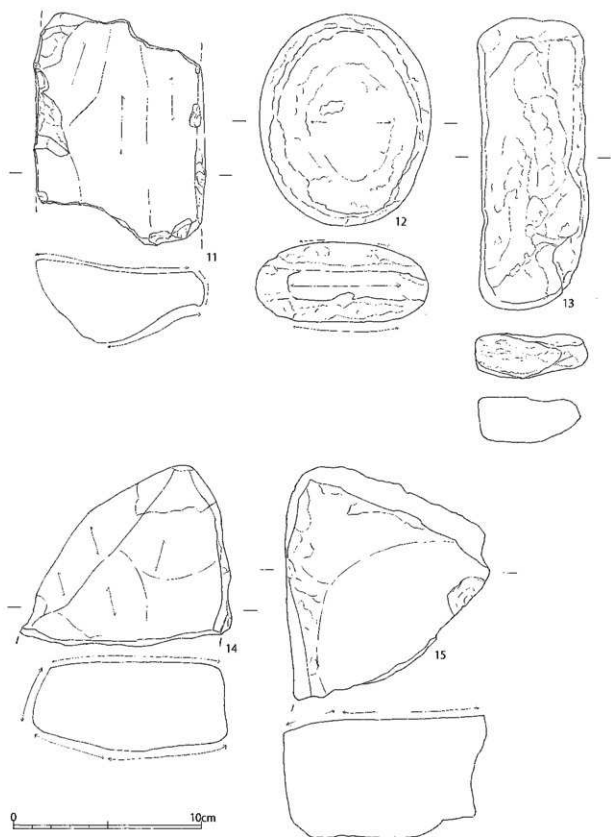
第33図 SX2・SX3 出土遺物実測図 (1/4)

と考えられる砂岩製の大型品である、側面に自然面が残るが表裏と側面の一部を底面として使用する。

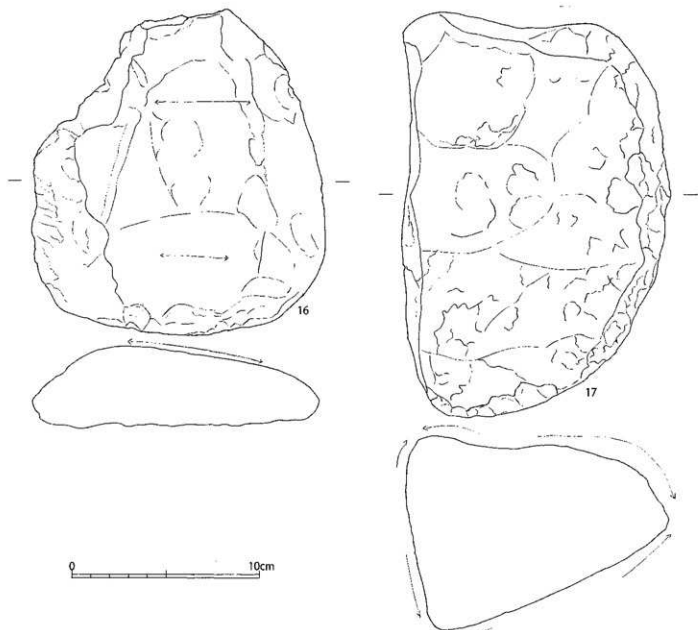
12～17 はすり石である。材質は 13 が砂岩製、12、14 が玄武岩製、15、17 が花崗岩製、16 は片岩製である。12 は SX3 出土、円形であり表裏にもすり面は確認できるが、側面の下端が一番強いすり面である。13 は SK12 出土、縦長であり下端のみすり面が確認できる。14 は SK7 出土、下部を欠失する。3 面にすり面が確認でき、すり面が確認できない面には比熱の痕跡が残る。15 は SK10 出土、三角形で上面のみすり面が確認できる。16 は SX1 出土、扁平な円形で上面に弱いすり面が確認できる。17 は大型の花崗岩礫を使用し、全面に強いすり面が確認できる。



第 34 図 出土石器実測図 1 (2/3)



第 35 图 出土石器实测图 2 (1/2)



第 36 図 出土石器実測図 3 (1/2)

IV おわりに

遺構の時期と変遷

今回の調査で検出した主な遺構は、住居址 3 軒、土坑 12 基、井戸 1 基、不明遺構 3 基である。各遺構の時期であるが、大きく弥生時代前期後半から中期前半までと後期、周辺の伊方城跡遺跡に重複する 9～12 世紀代の遺構を検出している。

弥生時代の遺構であるが遺物の時期から見て、前期後半から中期前半までと後期に大きく分けられる。ほとんどは前期後半から中期前半までの貯蔵穴を含む土坑である。

SI1 から出土した甕の口縁部はくの字状に屈曲し長胴化することから弥生時代後期の特徴を示す。今回の調査で確認した、弥生時代後期に属する遺構はこの SI1 のみである。

SI3 では細片であるものの甕の口縁部片が出土、形態から屈折口縁で1は端部がやや肥厚し中期初頭の特徴を持つ。

SK2・3 では甕の口縁に前期的特徴を残すが、出土した底部には上げ底になるものが見られ前期末から中期初頭頃。SK4 では、第12図1のように口縁端部の下端に刻み目を施し前期的様相も残るが、他の甕は中期初頭の様相を示し、7は完成した鋤先状口縁である。底部は全て上げ底であり中期初頭と考えられ、甕の特徴も中期初頭頃の特徴を示す。SK5 出土土器も中期初頭の特徴を示す。SK7 の出土遺物は甕の口縁は如意形が多く、口縁下に沈線をめぐらすものも多い。壺には羽状文や、迎弧文、二枚貝を用いた重弧文などが見られ遠賀川以東地域の特徴も示し、前期後半から末頃と考えられる。SK8 出土遺物は甕の特徴から中期初頭頃と考えられる。SK9 出土遺物は甕では前期的特徴を残し、前期末頃と考えられる。SK10 出土遺物の甕では底部に上げ底が見られ、SK9 よりやや下る時期と考えられ、前期末から中期初頭頃と考えられる。20の器台は中期前半まで下る様相を持つ。SK11 出土遺物は前期的な様相も残るが、底部は全て上げ底であり、前期末から中期初頭頃と考えられる。SK12 では中期初頭頃の遺物が出土している。

SX1 では、後期の遺物が見られ、内部の住居址 SI1 でも後期の遺物が出土している。SX2 出土遺物は甕の形態から中期後半頃と考えられる。遺物には丹塗りの痕跡が残るものがあり SX3 と同様祭祀的性格を持つものであろう。SX3 では西側に石材の集積を検出、搬入礫も認められる。甕の形態から中期であらう。SX2 と時期差があるものの同様に祭祀的性格を持つものであろうか。

9～12世紀代の遺構はSK1とSE1である。SK1では第9図3のような土師器坏、5のような同安窯系の青磁碗が出土する。SE1では第30図1、2のような白磁の口縁部片が出土している。SK1の出土遺物は9世紀から12世紀の後半まで認められるものである。SE1では少ない遺物からではあるが12世紀の前半の資料が出土しこの時期前後に使用していたといえる。

弥生時代前期後半～前期末	SK2・3、SK7、SK9、SK10
弥生時代前中期初頭～中期前半	SI3、SK4、SK5、SK6
弥生時代中期前半～後半	SX2、SX3
弥生時代後期	SI1、SX1
9～12世紀代	SK1 SE1

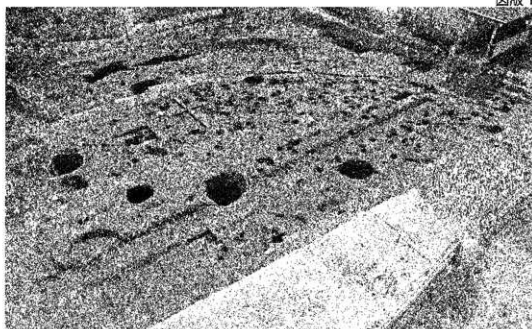
今回の調査では主に弥生時代前期後半から中期前半までの貯蔵穴、土坑と不確定ながら弥生時代中期と考えられる住居と後期の住居を検出した。また、伊方丘陵の遺跡から多く検出される貯蔵穴の時期に該当する住居が1軒確認された。

今回の調査で検出した貯蔵穴、住居址と共に近くで調査された法華屋敷遺跡でも弥生時代前期末頃の貯蔵穴が確認され、伊方石丸遺跡では弥生時代中期前半から後半にかけての墳墓群が確認されている。これらの遺跡は伊方丘陵が弥生時代の中心的地域となっていたことを示す資料である。

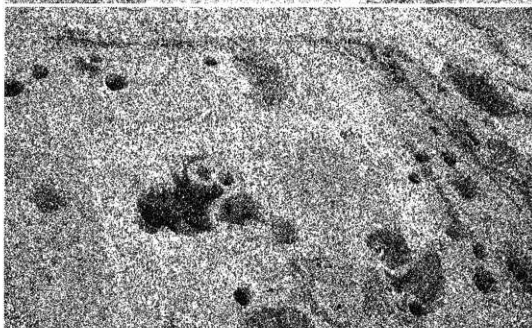
また、伊方丘陵はその後在地首長墓である伊方古墳が築かれ、文献に残る「伊方の庄」、官衙的な伊方城園遺跡が営まれる。伊方城址の伝承もあり、この地は弥生時代から中世にかけて中心地として人々が生活していたことがうかがえる。

图 版

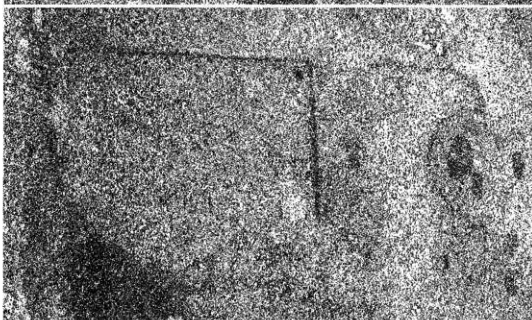
1. 調査区全景
(北西から)

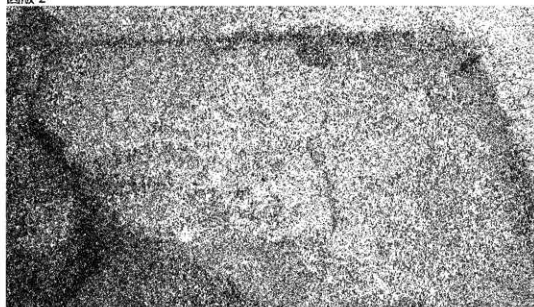


2.SI1 完掘状況
(北から)

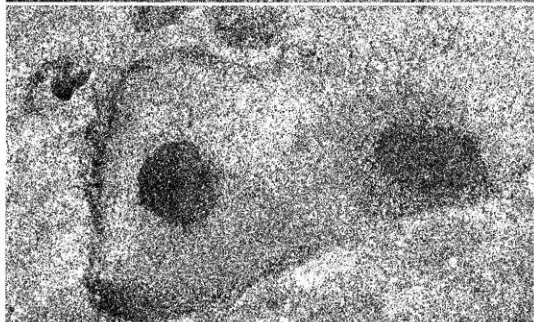


3.SI2 床面検出状況
(南から)

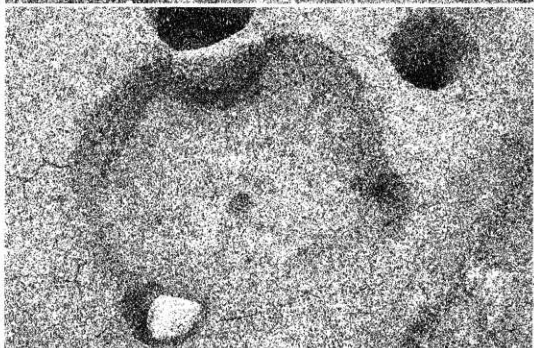




1.SI2 完掘状況
(南から)



2.SI3 完掘状況
(西から)

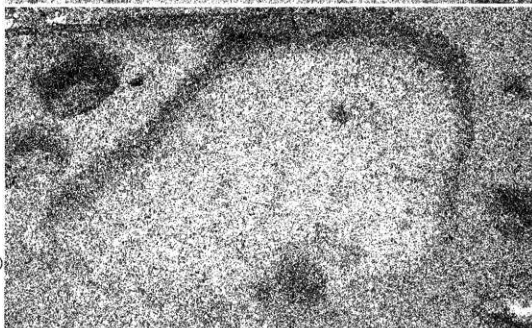


3.SK1 完掘状況
(西から)

1.SK2 (右)・SK3 (左)
遺物出土状況
(南から)

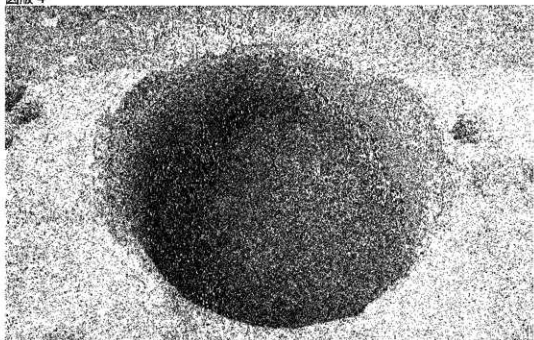


2.SK2 (右)・SK3 (左)
完掘状況
(南から)

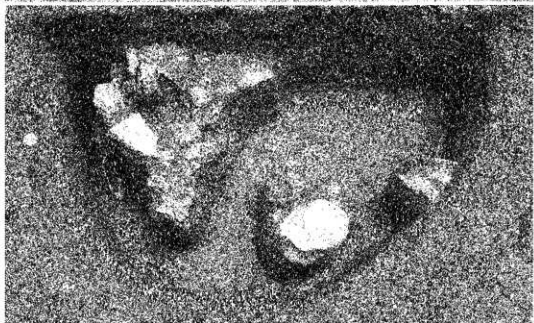


3.SK4 土冠状況
(南から)

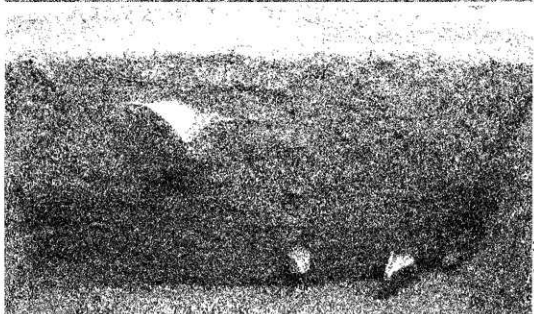




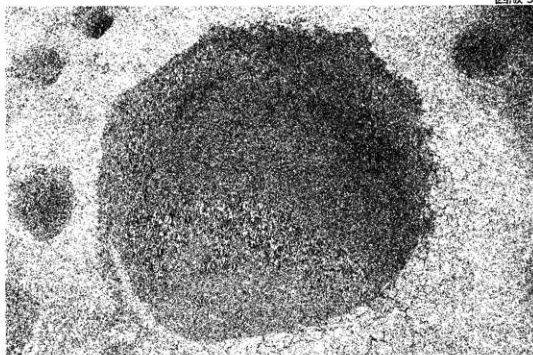
1.SK4 完掘状況
(南から)



2.SK5 遺物出土状況
(北から)



3.SK5 上層状況
(北から)



1.SK5 完掘状況
(東から)



2.SK6 十層状況
(南から)



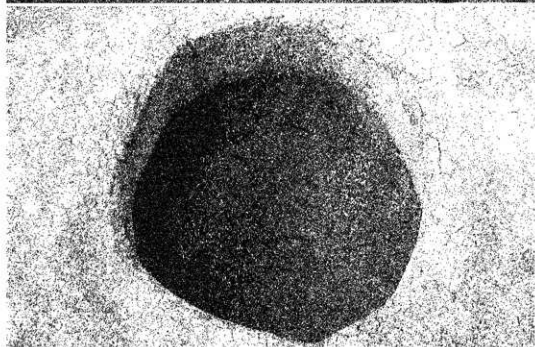
3.SK6 完掘状況
(南から)



1.SK7 遺物出土状況 1
(西から)

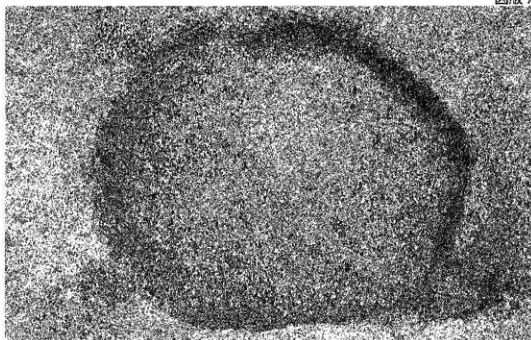


2.SK7 遺物出土状況 2
(北から)

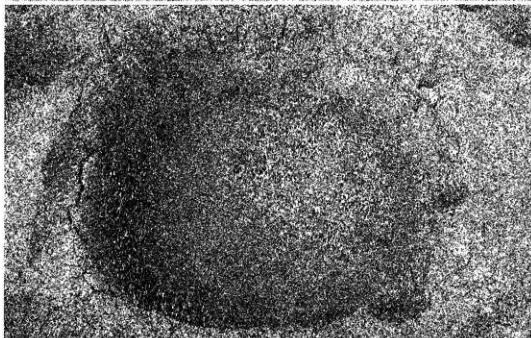


3.SK7 完掘状況
(南から)

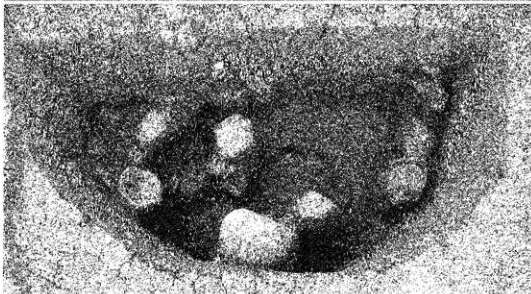
1.SK8 完掘状況
(南から)

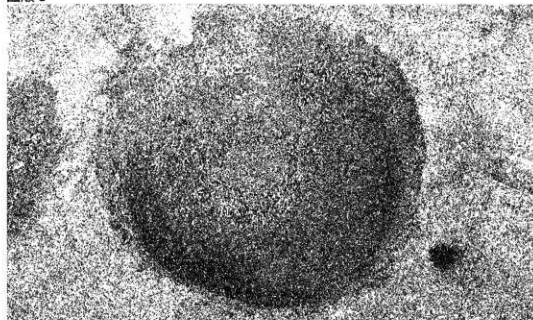


2.SK9 完掘状況
(南から)



3.SK10 遺物出土状況
(西から)

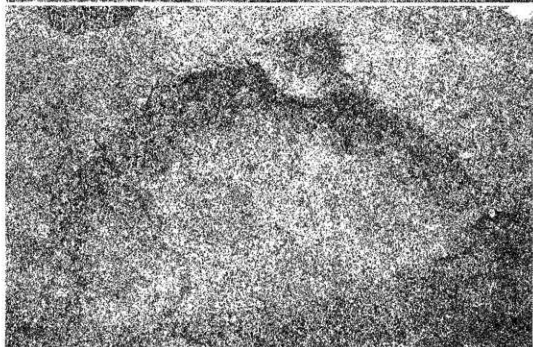




1.SK10 完掘状況
(西から)



2.SK11 土層状況
(東から)

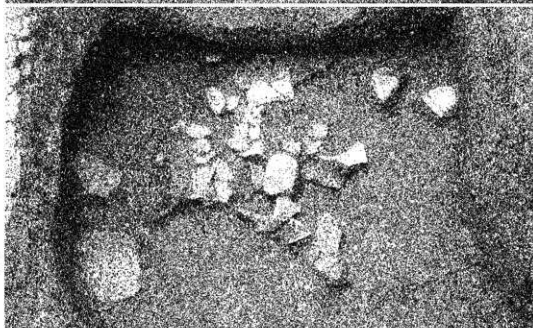


3.SK11 完掘状況
(南から)

1.SK12 上部
(南から)

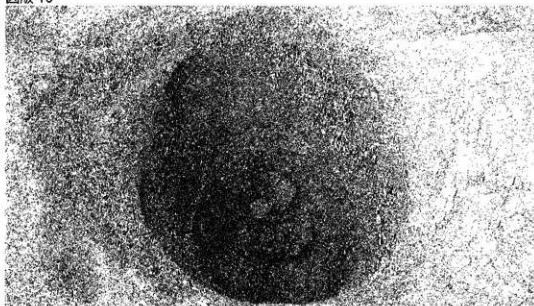


2.SK12 遺物出土状況
(南から)



3.SK12 完掘状況
(南から)





1.SE1 完掘状況
(南から)

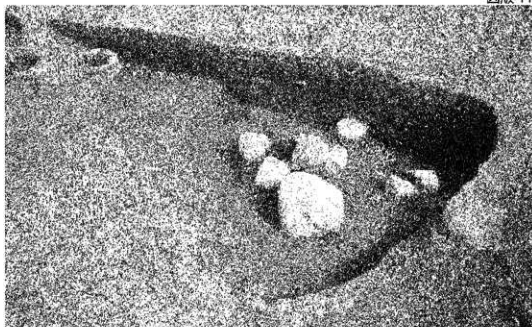


2.SX1 (右)・SX2 (左)
検出状況
(北から)



3.SX2 遺物出土状況
(北から)

1.SX1 石材検出状況
(西から)

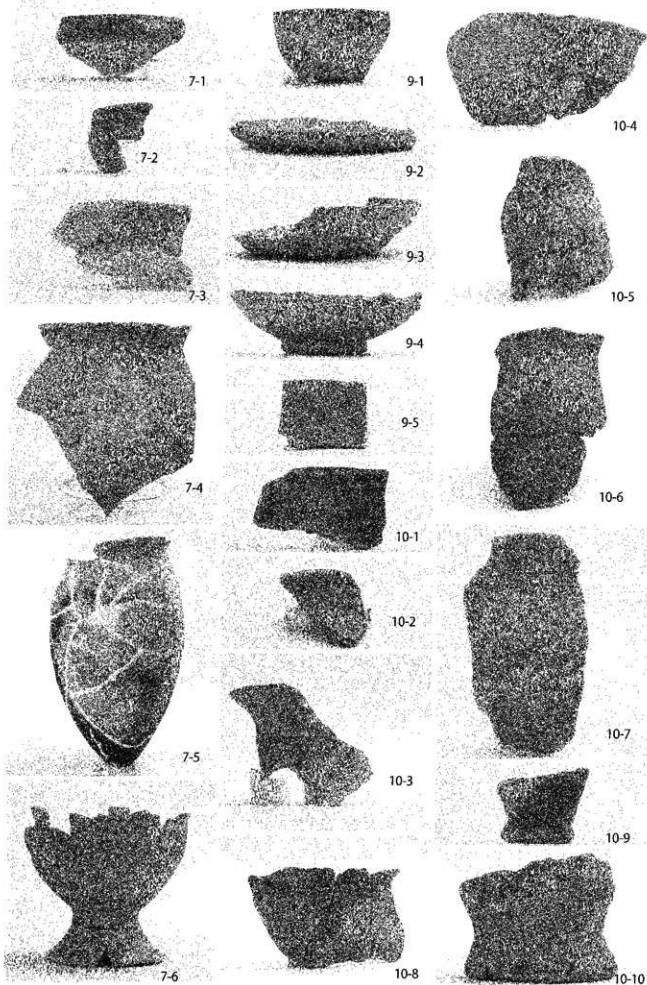


2.SX3 完掘状況
(東から)



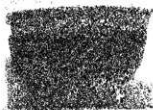
3. 伊方小学校児童
見学風景







10-11



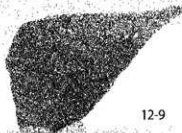
12-8



12-18



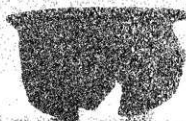
12-1



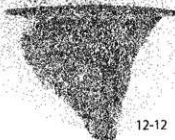
12-9



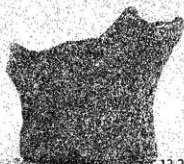
12-19



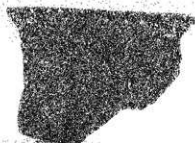
12-3



12-12



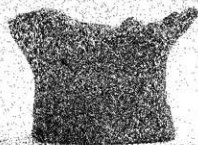
12-20



12-3



12-13



12-21



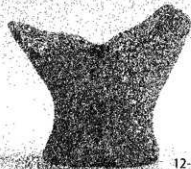
12-14



12-4



12-15



12-22



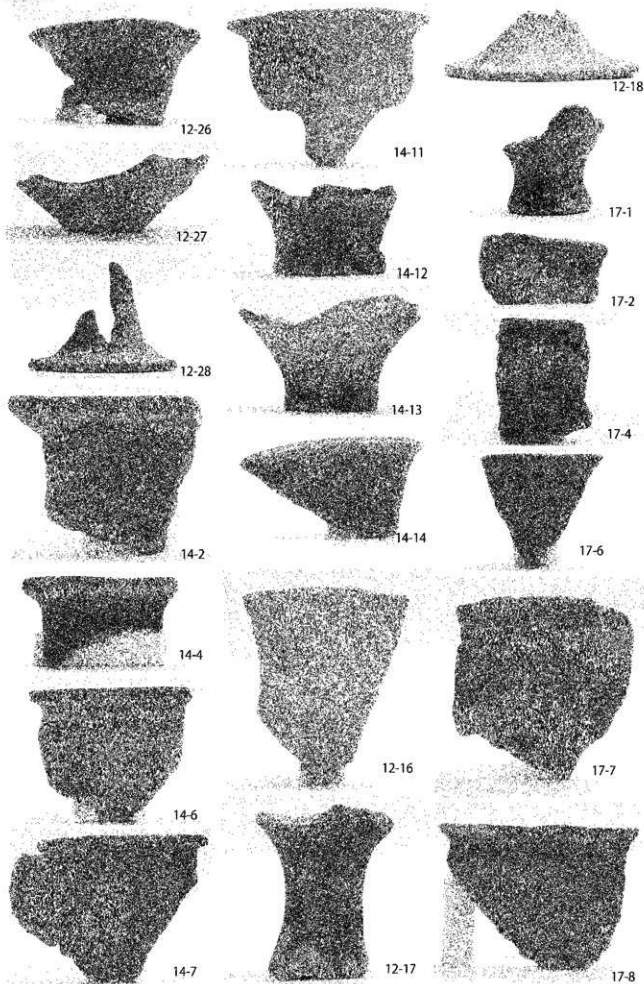
12-7

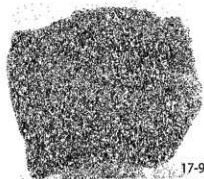


12-16

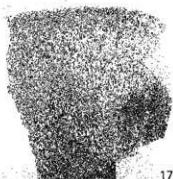


12-23

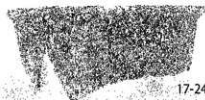




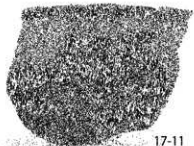
17-9



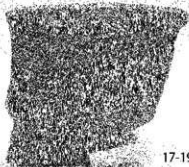
17-18



17-24



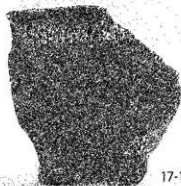
17-11



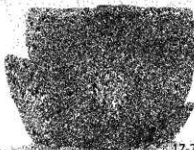
17-19



17-25



17-14



17-21



17-26



17-15



17-22



17-27



17-16



17-28



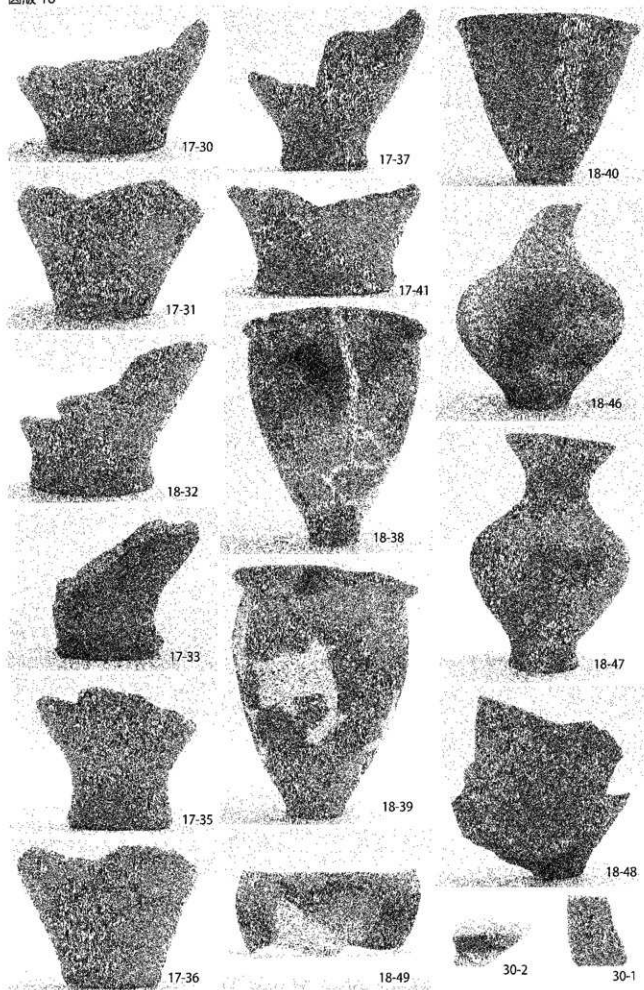
17-17



17-23



17-29

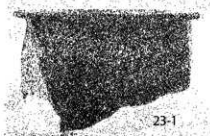




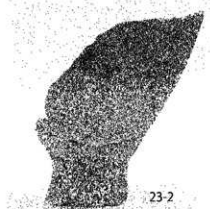
19-50



19-51



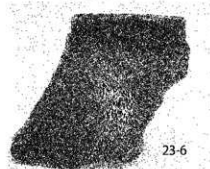
23-1



23-2



20-3



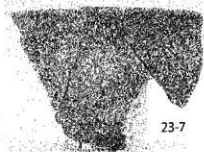
23-6



23-4



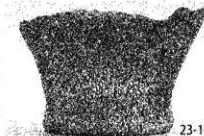
23-5



23-7



23-8



23-10



23-11



23-13



23-15



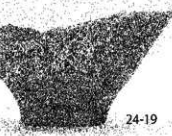
24-16



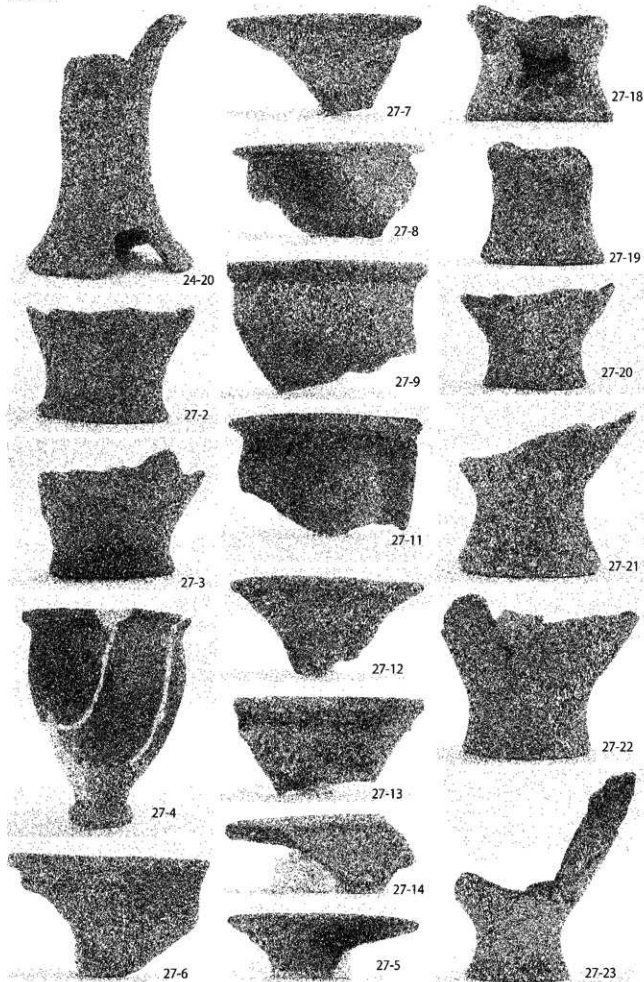
24-17

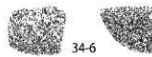
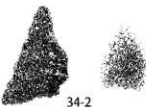
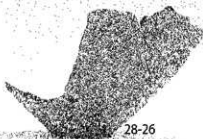
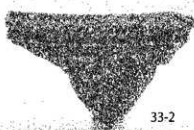
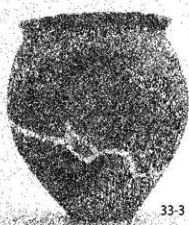
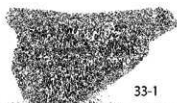


24-18



24-19





報告書抄録

ふりがな	いかたしょうがっこういせきだいよんちてん							
書名	伊方小学校遺跡第4地点							
副書名	福岡県田川郡福智町伊方所在遺跡発掘調査報告書							
シリーズ名	福智町文化財調査報告書							
シリーズ番号	第4集							
編著者名	井上勇也・斎藤亮磨							
編集機関	福智町教育委員会							
所在地	福岡県田川郡福智町赤池 970-3 TEL 0947-28-2046 FAX 0947-28-4565							
発行年月日	2014年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号		北緯	東経	発掘期間	発掘面積	発掘要因
伊方小学校遺跡第4地点	福岡県 田川郡 福智町 伊方 715-1 他	40610		33° 40' 42"	130° 46' 47"	20110517 ～ 20110915	約 1,000㎡	伊方小学校 屋内運動場 改築
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
伊方小学校遺跡第4地点	集落	弥生時代、中世	住居、貯蔵穴、井戸		弥生土器、石器			
要約	平成23年度、伊方小学校屋内運動場改築事業に伴い本調査を行った。 調査の結果、貯蔵穴、住居址等を検出し、弥生時代の集落遺跡を確認した。							

伊方小学校遺跡第4地点
福智町文化財調査報告書第4集

平成26年3月31日

発行 福智町教育委員会

〒822-1101 福岡県田川郡福智町赤池970番地3

印刷 マツオ印刷株式会社

〒821-0012 福岡県嘉麻市上山田407番地